

東大文



平成27年度

文学部夏期特別プログラム

2015年8月1日-15日

東京の部・北海道の部

報告書

Report on 2015 Special Summer Program
at the Faculty of Letters

August 1-15, 2015
in Tokyo and Hokkaido

1. 巻頭挨拶

若い感性のために

東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長 熊野純彦 …………… 2

双方向の交流開始に向けて

セインズベリー日本藝術研究所 水鳥真美 …………… 3

2. プログラムの概要

サマープログラムの概要 …………… 4

3. プログラム実施内容

東京の部 イーストアングリア大学 日本美術・文化遺産准教授 松田陽 …… 5

常呂の部 東京大学大学院人文社会系研究科 准教授 熊木俊朗 …………… 7

4. 参加者レポート

1. Anna Meyer 【スイス】 …………… 10

2. Charlotte Battersby 【イギリス】 …………… 13

3. Lauren Bell 【イギリス】 …………… 17

4. Martha Craven 【イギリス】 …………… 22

5. Stephanie Pirk 【ドイツ】 …………… 25

6. 岡田進之介 【教養学部2年】 …………… 27

7. 竹崎宏基 【文学部4年】 …………… 30

8. 福島賢士 【教養学部2年】 …………… 32

9. 夜久千華 【教養学部1年】 …………… 35

5. 総括

まとめと今後の展望

東京大学大学院人文社会系研究科 教授 佐藤宏之 …………… 38



北村咲子撮影

若い感性のために

東京大学大学院人文社会系研究科長・文学部長

熊野 純彦

旧常呂町には、北海道ばかりでなく、サハリン・ロシア極東地域にまでひろがる北海文化の豊富な遺跡がのこされている。このことを最初に発見したのは、常呂町在住の方であった。いくつかの偶然も介して、東京大学文学部の考古学研究室を中心とする研究活動が、かの地で開始されたのは、およそ半世紀の時をさかのぼる、1950年代からのことである。1973年、大学院人文科学研究科（当時）ならびに文学部は、常呂町に附属北海文化研究常呂実習施設を開設し、同施設は、旧常呂町（現北見市常呂町）を中心とする地域連携の拠点ともなっており、現在にいたっている。

人文社会系研究科（現在の名称）・文学部では、数年まえから同実習施設を拠点として、年二回の公開講演会をふくめ、北見市のご協力も仰ぎながら、教育研究を深化させ、また当該地域との関係をも深めている。現在では、常呂実習施設は博物館に相当する施設としての認定をも受けて、たんに考古学にかかわる実習ばかりではなく、学芸員資格を取得するために必要とされる博物館実習の場としても活用されているところである。

常呂実習施設は、現在のところ、人文社会系研究科・文学部が、本郷キャンパスおよび学外に有する唯一の教育研究施設である。そればかりではない。当該施設には、教育研究のための充分とはいえないまでも相当な設備がととのえられ、貴重で膨大な研究資料が蓄積されている。平成26年度から開始された「文学部夏期特別プログラム」は、この設備と研究資料とをさらに有効に利用し、くわえてまた国際交流の実質を挙げようとするところみのひとつである。後者にかんしては、イギリス連合王国ノリッチに所在する、セインズベリー日本藝術研究所の全面的なご協力を忝くしていることは、ここに特記しておかなければならない。

はじめにしろしたとおり、常呂町にひろがっているのは、サハリン・ロシア極東地域にまでおよぶ北海文化の、貴重かつ豊富な遺跡である。現在の国家や国境がなおその意味をもつに先だつて展開された先人たちの生の痕跡が、北の海から打ちよせ、吹きよせる波と風、厳しくも豊かな北の大地の一隅にひろがっている。そこでもいまなお確認されるのは、この地上におけるひとの生が紡ぎだした、ミニマムな、とはいえまた多様な暮らしが刻みこんだ軌跡である。遺されているのはまた、すでに精緻をきわめた技巧の所産であり、ひとがこの世を超えたものに寄せていた思いのかけらたちでもある。

若い感性が、国家成立以前のひとの生の息吹きを感じ、ひとびとが共に生を織りあげるいとなみが自然のうちに刻印したものにふれて、現在の世界のかたちを考え、未来の生のすがたに思いをめぐらせることを期待してやまない。



双方向の交流開始に向けて

セインズベリー日本藝術研究所

水鳥真美

東京大学文学部とセインズベリー日本藝術研究所による日欧米学生の国際交流プログラムは2年目を迎えた。今年も20倍以上の競争を勝ち抜いた欧米からの5名の学部生が、猛暑をものともせず日本の考古学、歴史文化遺産を学ぶため、8月前半の2週間を日本で過ごした。短いと思われるかもしれないが、短い故に内容は充実している。東京における座学、各種美術館、博物館への訪問、グループに分かれての演習、日光視察の後、由緒ある北海道常呂にある東京大学の実習施設に展開。ここでは衣服の上からでも刺すと恐れられる蚊をものともせず、発掘調査の実地体験に従事した。時差を感じる暇もない強行軍だ。

このプログラムはなぜ、人気があるのか。東京大学文学部の優れた指導陣の下で多様なプログラムをこなし、紙の上で学んできた日本に肌で触れ、学ぶ機会を与えられることは稀有な体験だ。それ以上にこのプログラムの売りは、東京大学からも5名の学部生が参加し、寝起きをともにし、朝から晩まで一緒に活動することである。これは結構しんどい状況である。仲の良い友達でも2週間一緒に過ごすと面倒臭いと感じることもある。ましてや知らない人。言語の問題もある。それでも、日本への留学を希望する欧米人学生が最も望むことは、同世代の日本人が何を考え疑問に思っているかを知り、意見をかわすことだ。このプログラムは、有無を言わず学生たちをこのような状況におく。

そして今年度から交流は双方向になる。2016年2月には、東京大学の学生5名が2週間英国を訪れる。ストーン・ヘンジ始めロンドン近郊における各地視察の後、研究所が所在するイングランド東部のノーフォーク州ノリッチで英国の考古学、歴史文化遺産を勉強する。同年代の英国人学生との交流が重要な要素となっている。また、英語力向上も兼ねて渡英前に5週間にわたるオンライン講座を受講し、ノーフォークの考古学についての基礎知識を身につけてきてもらう。日本からも多くの応募者が出てこの交流が長く続くことを切望する。そのためにも今、研究所では余念無く準備にあたっている。

2 サマープログラムの概要

- 実施期間** ■ 2015年8月1日(土) - 8月15日(土)
- 内 容** ■ 前半：本郷キャンパスでのプログラム(8月1日-8月7日)
- 江戸東京博物館、日光東照宮、國學院大学博物館、東京国立博物館、野毛大塚古墳等、歴史系博物館・歴史文化遺産の見学
 - 谷中・根津・千駄木地区での下町文化に関するグループワーク
 - 東京藝術大学美術館、国立新美術館、サントリー美術館、森美術館等、美術館の特別展、常設展等の観覧
- 後半：人文社会系研究科附属常呂実習施設(北海道北見市常呂町)でのプログラム(8月8日-8月15日)
- 擦文文化(11世紀頃)の竪穴住居跡 遺跡発掘体験(北見市大島2遺跡)
 - 北見市および網走市周辺の遺跡、博物館の見学
 - 勾玉製作体験・土器接合体験等、考古資料の製作・整理実習
- 担当講師** ■ 松田 陽(イーストアングリア大学 日本美術・文化遺産准教授)
設楽博己(東京大学大学院人文社会系研究科 教授)
高岸 輝(東京大学大学院人文社会系研究科 准教授)
熊木俊朗(東京大学大学院人文社会系研究科 准教授)
イローナ バウシュ(東京大学大学院人文社会系研究科 客員准教授)
- 募集方法等** ■ 2015年4月に東京大学文学部ならびにセインズベリー日本藝術研究所の website で告知、募集開始。参加申込者に対し書類選考の後、5月中旬に申込者に通知。
- 受講者** ■ 東京大学学部後期課程学生4名、セインズベリー日本藝術研究所からの派遣学生5名
- 支援者** ■ 東京大学大学院人文社会系研究科 助教1名 特任助教1名
(プログラムに同行) ティーチングアシスタント(東京大学大学院人文社会系研究科修士および博士課程大学院学生)3名
- 協力** ■ 北見市教育委員会



常呂遺跡



サロマ湖



国立新美術館

東京の部



ガイドス

プログラムの前半では東京に滞在しながら、日本の歴史文化遺産の全体像の把握に努めた。初日のガイドスでは林徹副研究科長が受講者を歓迎し、プログラムの趣旨説明を行った。その後、受講者たちが英語で自己紹介を行い、各人の抱負を語った。二日目以降は、本郷キャンパスでの座学、都内および近郊の博物館・美術館や史跡等への訪問実習を行いながら、日本の歴史文化遺産の多様な側面を学んだ。受講者たちは本郷キャンパス近くのホテルに泊まりながら課題をこなし、日本と海外との壁を超えるかたちで親交を深めた。



座学後の発表会

本郷キャンパスでの座学

設楽担当講師が日本の先史時代（旧石器、縄文、弥生、古墳時代）の考古学および土偶と埴輪の概要を1時間半ほどかけて説明した後、受講者は三グループに分かれて、それぞれ縄文文化、弥生文化、古墳文化のうちの一つについて約30分かけて調べ、英語で5分間の口頭発表を行った。各グループには東京大学の学生と海外からの学生とが混ざるように配分し、また最も優れた発表を行ったグループを選出する旨を事前に伝えた。発表後、松田担当講師が講評を行った。

文学部考古列品室での見学実習

設楽担当講師による解説の下、文学部考古列品室にある資料を30分ほど掛けて丁寧に見て回り、座学で学んだ考古学の知見をモノの理解を通して強化することに努めた。

博物館・美術館での見学実習

考古学や美術史学はモノないしは作品を通して過去を探求する学問であることを意識し、東京滞在中は博物館・美術館にて実物の資料を見て学ぶ機会を多く設定した。訪問した館



考古列品室

東京の部

は、江戸東京博物館、東京藝術大学大学美術館、国立科学博物館、國學院大學博物館、JPタワー学術文化総合ミュージアム・インターメディアテク、東京国立博物館、国立新美術館、サントリー美術館、森美術館（訪問順）であり、高岸担当講師、バウシュ担当講師、松田担当講師が分担しながら解説を行った。國學院大學博物館では、同館の内川隆志教授に案内して頂いた。期間限定の大型特別展を見る機会もあり、東京藝術大学大学美術館では「うらめしや〜、冥途のみやげ」展、国立新美術館では「ニッポンのマンガ*アニメ*ゲーム」展および「アーティスト・ファイル 2015 隣の部屋——日本と韓国の作家たち」展、サントリー美術館では「藤田美術館の至宝 国宝 曜変天目茶碗と日本の美」展、森美術館では「ディン・Q・レ展：明日への記憶」展を見学した。

歴史文化遺産サイト訪問

歴史を学ぶ上では、実際の地理的空間に結びつけながら考察を進めることが重要であるとの認識に基づき、東京滞在中には歴史文化遺産サイトも積極的に訪問した。訪問したのは、浅草、日光、等々力溪谷、野毛大塚古墳である（訪問順）。浅草訪問は、浅草寺という今日の東京を代表する歴史文化遺産が、今日どのように社会的に受容され、また使用されているのかを直接体験しながら学ぶ機会となった。半日かけて行った日光訪問では、東照宮を見学するのみならず、陽明門および三仏堂の修復の状況を直接見ながら学んだ。また、オランダから寄贈された回転灯籠を前にして、バウシュ担当講師が江戸時代の日本とオランダの関係について解説した。等々力溪谷と野毛大塚古墳を訪問した際には、東京 23 区唯一の溪谷を体験し、それから造営時の姿に復元された古墳の墳頂に登って、古墳文化についての理解を深めた。



國學院大學博物館



サントリー美術館



浅草寺



野毛大塚古墳



陽明門改修

常 呂 の 部



熊木講師による講義



勾玉製作体験



土器接合体験



修了証授与式



地元の方々との交流

プログラムの後半では北海道に移動し、人文社会系研究科の附属施設である常呂実習施設で北海道の歴史遺産を体験的に学んだ。常呂のプログラム中は施設に附属する学生宿舎に宿泊し、自炊もしながら課題に取り組み、受講者同士や参加スタッフ、そして地元北見市の支援者とも交流を深めた。プログラムの最後には各受講者がレポートを提出し、担当講師から修了証の授与が行われた。

北海道の先史文化概説(講義)

常呂でのプログラムは、「北海道の歴史遺産について体験を通じて学ぶ」ことを主眼としている。プログラム全体への理解を深めるため、熊木担当講師が北海道の先史文化の概要について講義を行った。縄文時代以降、本州とは異なる歩みをみせる北海道の先史文化の特徴について、続縄文文化やオホーツク文化、アイヌ文化の成立過程など、本州やロシア極東との交流関係に注目しながら順を追って紹介した。

勾玉の製作体験

縄文時代の勾玉を実際に製作してみる体験を通じて、古代の技術や造形に対する理解を深めた。題材としたのは常呂の遺跡から出土したヒスイ製の勾玉で、実際の製作においては加工しやすい「滑石」を材料として約2時間かけて手作業で削って磨きをかけ、各受講者が1個ずつ勾玉を完成させた。製作作業にあわせて、当時の加工技術や原材料と製品の流通についても紹介した。

遺跡出土土器の接合体験

遺跡から出土した土器の破片を接合する作業の体験を通じ

常 呂 の 部

て、考古学研究の方法について実践的に学んだ。遺跡出土の土器片について1点1点文様を観察して型式毎に分類し、ジグソーパズルを合わせる要領で破片同士の接合を試み、土器のかたちを復元する作業を行った。教材となる土器片については、北見市教育委員会から実物資料を借用した。

実習施設周辺の遺跡見学

実習施設の周辺には、国指定の史跡「常呂遺跡」を中心として大規模な先史時代遺跡が数多く存在している。このうち、史跡「常呂遺跡」の各地点（ところ遺跡の森地点、栄浦第二遺跡、トコロチャシ跡遺跡）とトコロ貝塚を見学し、遺跡の保護と活用に対する取り組みを実例で学んだ。

遺跡発掘体験

常呂町内に存在する「大島2遺跡」において遺跡の発掘を体験し、考古学の調査と研究の方法について学んだ。大島2遺跡は擦文文化期（11世紀頃）の竪穴住居跡が窪みで残る集落遺跡で、発掘はその窪みのうちの1軒を対象として実施した。担当講師の指導のもと、受講者は移植ゴテで竪穴の埋土を丁寧に掘り下げ、炭化材や石器などを検出した。発掘調査に初めて参加する学生も多く、歴史遺産を体感する貴重な経験となった。

博物館見学

実習施設の近隣に位置する各博物館、すなわち、ところ遺跡の館、常呂町郷土資料館（以上北見市常呂町内）、北海道立北方民族博物館、網走市郷土博物館、博物館網走監獄、モヨロ貝塚館（以上網走市内）、ふるさと館JRY（以上湧別町内）を見学した。これらの館はいずれも地域の特色ある歴史や文化を紹介した博物館であり、受講者は展示資料を実見しながら、地域の歴史遺産について理解を深めた。

考古学と現代社会（講義）

プログラム全体の総括を兼ねて、バウシュ担当講師が“Japanese archaeology, modern society and identity: a Jomon case study”と題した講義を行った。縄文文化が、現代の個人の価値観や美意識、地域社会のアイデンティティ形成に対して寄与している具体的な事例について知ることにより、現代社会における歴史遺産の価値や存在意義について理解を深めた。



常呂遺跡



発掘体験



博物館網走監獄



網走市郷土博物館



バウシュ講師による講義

東京の部



常呂の部



Tokyo part

▶ Day 2–2nd August

We started the first day of the summer program with a lecture on prehistoric age in Japan at the University of Tokyo. After getting an introduction to the Jomon, Yayoi and Kofun periods we were divided into three groups and carried out little group work on one of these three periods. At the end of the morning part we were asked to explain the results of our group work in a brief presentation. We presented an overview of key facts about prehistoric Japan. We then had a chance to look at many prehistoric artifacts in the storage room of the archaeology department and were able to broaden our understanding of these periods.

In the afternoon we visited the Tokyo Metropolitan Edo-Tokyo Museum. The museum was very big and divided into two sections, one of which was about Tokyo during the Edo period and the other about modern Tokyo starting from the early Meiji period. There were many impressive reconstructions, such as a reconstructed Nihonbashi Bridge and reconstructed inner parts of houses of various periods. In one of the reconstructions, Nakamura-za (a Kabuki theater of the Edo period), there was a performance by a shamisen player and a shakuhachi player, in which they briefly explained their instruments and played some songs. It was a very interesting and entertaining show, which demonstrated a special flair being performed in the beautiful reconstruction. The more modern part of the museum was also highly interesting, showing for example some videos from the last century and clothes that were deemed modern in those days.

▶ Day 3–3rd August

In the morning of the second day we took a train from Asakusa to visit Nikko. Nikko has a beautiful landscape and there are also a very famous temple and a shrine complex with the Toshogu Shrine. Sadly the famous Yomeimon was being renovated and we were unable to see it, but the site was still extremely impressive. We observed renovation work being carried out in one of the shrines which was a unique opportunity and very interesting. It was a very hot day, and on the way back we stopped for really delicious shaved ice.

▶ Day 4–4th August

On this day we strolled through some ancient parts of Tokyo. It was fascinating to note how close from the loud and extremely modern city center one can find very calm and beautiful places with many old houses. We visited a very big cemetery which was mostly buddhist but we also found in it a grave of a christian priest, which I personally found very interesting. During the stroll we also visited two exhibitions on Japanese ghosts and later had lunch at the canteen of the Tokyo University of the Arts. In the afternoon we went to the National Museum of Nature and Science, which was very big and had a great variety in their exhibitions. The part I liked most was about the development of prehistoric Japanese people to modern ones.

▶ Day 5–5th August

We went to the Kokugakuin University Museum where we received a very warm welcome from its staff. We were even given some presents including a bag and a very nice book. The museum has two sections, one of which is about Shinto and the other about archaeology. First we had a look at the Shinto part, where the museum's staff explained about shintoist rituals to us. The archaeological part included many pots and we saw different cords that Jomon people used for decorating their pottery with special patterns.

In the afternoon we visited a Kofun, Noge Otsuka Burial Mound, which is located near to Tokyo's city center. From the nearest train station we had a very nice stroll along a small stream and after few minutes we arrived at the Kofun. We went up to the top of the Kofun where there was a drawing of what they had been found inside the Kofun. It was the first time for me to see a Kofun in real and the whole experience was memorable.

At the end of the day we visited the Intermediatheque, which is a very special museum. The museum had a quite unique way to display objects; they put only small text labels to explain the exhibited objects. I very much liked the atmosphere of

this museum and felt that the fact that explanations were very brief enabled one to concentrate on the objects and our own perception of them.

▶ Day 6 – 6th August

On Thursday morning we visited the Tokyo National Museum at Ueno. The museum showed a great variety of artifacts from Japan and other Asian countries. There were many beautiful paintings and calligraphic works which were fascinating. What I liked most was the section on buddhist statues.

After lunch we went to queue up to buy tickets for a Kabuki performance at Ginza. It was very hot but luckily we only had to wait for about half an hour. Then we spent some time to buy souvenirs at shops under the Kabuki theater. During the performance we used a small rented device on which the English subtitles of the performance were shown, and thanks to this device we were able to understand the dialogues. Still it was quite difficult for me to follow the story entirely because it was very complex. I had hoped to watch a Kabuki performance for a long time and was very happy to get the possibility to do it at last. What I found very interesting about the play was that as it was adopted from ningyo joruri, the Japanese puppet theater; during the first part of the play there were a recitator and a shamisen player on the stage.

▶ Day 7 – 7th August

On the last day of the Tokyo part we visited many different exhibitions. We started with the “Manga * Anime * Games from Japan” exhibition at the National Art Center, Tokyo. There were many games we could play: for example, a dancing machine. There was one section which briefly introduced a variety of mangas and I found it very interesting and entertaining.

The next exhibition we visited was on contemporary art of currently active Korean and Japanese artists. There was a moving work which I found fascinating. Something in the object was always moving and many different sounds and entertaining shadows on the walls were produced.

After that we visited the Suntory Museum of Art. We saw a lot of Japanese paintings, calligraphies and ceramics. We lent an audio guide in English and learn many details of various objects. The most impressive object for me was a tea bowl in Tenmoku glaze with glistening spots on it. It had a beautiful blue color and it looked like a picture of the galaxy.

Then we visited an exhibition of Dinh Q. Le, a Vietnamese artist, in the Mori Art Museum. It included a variety of different objects, and all of them somehow linked to the Vietnam War. What I found most fascinating was his series of “photo-weaving”. The artist took pictures of the Vietnam War and weaved them together with pictures from Hollywood. He used a vietnamese grass-mat weaving technique to produce this series of works.

Hokkaido part

▶ Day 8 – 8th August

On Saturday we took an airplane from Haneda airport to Memanbetsu airport, which is located in the northern part of Hokkaido. From the airport we had an about one hour long car ride until we reached the research laboratory at Tokoro. After arriving there we had a short briefing session, in which the program for the week was explained. In the evening a welcome party with delicious food was held.

▶ Day 9 – 9th August

Because of the bad weather forecast for the coming week we already had our excavation on Oshima II site starting on Sunday. It was my first experience of archaeological excavation and it was very interesting. Although it was hot and the excavation work was extremely hard I am very happy to have had the possibility to try it.

▶ **Day 10 – 10th August**

In the morning we had a lecture about the prehistory of Hokkaido which is very different from that of Honshu. We then made a tour to the “Tokoro historic park” in which we saw some nice reconstructions of pit-dwellings. We entered one of the reconstructed pit-dwellings and got a very clear image of the lifestyle of people from the prehistoric times. In the afternoon we tried a pottery puzzle using potsherds from the Satsumon period. It was very hard to find fitting pieces.

▶ **Day 11 – 11th August**

On Tuesday we had a short introduction to magatama and then created our own magatama which was really fun. Later we visited a museum in Tokoro which was full of old objects that had been donated to the museum by local residents. We also made a short visit to a curling center in Tokoro. It looked like a lot of fun and I would love to try it out some time.

▶ **Day 12 – 12th August**

In the morning we visited various archaeological sites in Tokoro. We saw some pit-dwellings and also many shells from ancient periods. Then we shortly visited the Wakka Natural Flower Garden which looked very beautiful. We had lunch at a restaurant in Tokoro and for the afternoon programme we went to a museum in the neighbouring city, the Yubetsu Town Museum. Its building was very interesting architecturally. The museum mainly showed the life of the farmer-soldiers from Honshu who were sent to Hokkaido at the end of the 19th Century and subsequently founded Yubestu Town. In the museum there was also an original house from that period.

▶ **Day 13 – 13th August**

On Thursday morning we had a very interesting lecture about how Jomon cultures are perceived and utilised by Japanese people today.

Overall these two weeks were filled with an incredible amount of impressions and new experiences. We were able to see and learn so many new things and I am extremely glad and thankful that I got the opportunity to take part in this summer program.

Tokyo part

▶ Day 2–2nd August

Professor Hiromi Shitara gave us a brief overview of the Palaeolithic archaeology and history in the Japanese archipelago. The main focus of this was the Jomon, Yayoi and Kofun cultures and what cultural differences there were between these three periods. I had only learnt a small amount about dogu figurines in the Jomon period so my knowledge about the Palaeolithic period in Japan has expanded. We learnt the differences in art styles in the Jomon period with the pottery; Eastern Japan having more complex detailed pottery compared to the more basic designed pottery in Western Japan. We then got to experience some of the archaeological material that had appeared in the presentation as well as a few Korean and Chinese artefacts.

In the afternoon we visited the Edo-Tokyo Museum which covered the Edo period all the way through to present times. I have an interest in the Edo period so this was exciting for me. The visual displays and reconstruction models of the houses and towns helped set the atmosphere in what the Edo Period would have been like. The museum covered how well the Daimyos lived, how daily life was for the poorer civilians, the economy and trade. The Meiji restoration period followed on well from the Edo period displays and continued the impressive atmosphere with the accompaniment of visual displays. I learnt a lot of new information that has given me an insight to the modern history of Tokyo and has encouraged me to learn the information fully through studying in my spare time.

▶ Day 3–3rd August

On day three we visited Nikko to see the shrines and temples dedicated to Tokugawa Ieyasu who was the founder of the Edo period and had unified all of Japan. There used to be a simple Buddhist temple on the site at Nikko before Tokugawa Ieyasu requested in his will to have his remains buried at Nikko in 1617; a year after his death. We were joined by Ilona Bausch, a Dutch archaeologist, who gave us the history behind the bronze bell which was gifted by the Dutch East Indies Company. The architecture of the temples is unique in their lavishness to Tokugawa Ieyasu's complex. It was interesting to learn that Tokugawa Ieyasu is still worshipped as a deity in modern times. We also got to see inside the restoration of the Rinnouji Temple and see the Buddhist deity statues that were kept on display. Before we left Nikko to return to the hotel, we got to try shaved ice which we got to experiment with the different flavour syrups provided; it was very refreshing and tasty. Nikko was very enjoyable for me because it shows the impact that Tokugawa Ieyasu has had in Japan. It was also interesting to learn about the processions that still happen in modern day in Nikko which celebrates the Shogunate under Tokugawa Ieyasu.

▶ Day 4–4th August

We started day four by visiting Yanaka cemetery to visit the remains of the five story pagoda which got burnt down in 1957 and could not be rebuilt. The use of pictures in showing before the fire, the pagoda on fire and the aftermath of it helps give an image of the pagoda to the visiting tourists. It was displayed well considering that there is little remains of the pagoda and gives a detailed introduction to the history of the pagoda. We also viewed the grave of the last shogunate of the Tokugawa period which was Tokugawa Yoshinobu but this was small in comparison to the resting place of Tokugawa Ieyasu at Nikko. This emphasised how extraordinary the resting place of Tokugawa Ieyasu is compared to the small grave site of Tokugawa Yoshinobu. After this we visited a Japanese ghost art exhibit at Zensho-an Temple which was founded in 1883 by Yamaoka Tesshu who was a trusted retainer of Tokugawa Yoshinobu. It was interesting to see how ghosts were depicted in art by different Japanese artists. The majority of the ghosts depicted were women with the occasional man and demon depicted. Continuing on the supernatural theme of the day, we went to the University Art Museum, Tokyo University of the Arts exhibition on the Art works of the ghost featuring Zenshoan's Sanyutei Encho collection of ghost paintings. This was once again interesting to see because it was not only ghosts which were depicted but some demons also so it gave you an insight to the depiction of the folklore behind the supernatural in Japan. I really enjoyed both the cemetery visit and the two ghost art exhibitions we visited. We then visited the national museum of Nature and Science

in Ueno park which was really interesting because it had a lovely display of prehistoric archaeological artefacts and had an amazing Edo burial of a woman displayed.

▶ Day 5 – 5th August

On day five we first visited the Kokugakuin university museum which was divided into three sections; the prehistoric archaeology artefacts, the history of Shintoism and the history of the university. We were given an in depth tour by the head of the museum and the staff. The Shinto exhibition was really interesting because the staff member went into details about the foods that were offered to the gods for certain rituals and how these rituals were carried out. It was really interesting to learn details about Shintoism. We then went round the archaeological artefacts displayed which were explained in more detail. There was a great display of Jomon pottery, dogu figurines, Yayoi pottery, bronze bells and magatama beads etc. The one excellent display they had in the museum is the categorisation of identified textile patterns on pottery sherds by Yamanouchi Sugao. The final exhibition was quite small and just covered the objects collected by the founder. The museum was really interesting and I personally was fascinated by the Shintoism exhibition and it has encouraged me to read more about it.

In the afternoon we visited Otsuka burial mound in Todoroki valley park which was interesting because we got to see the actual archaeological mound in situ. The artefacts and skeleton were marked on top of the burial mound so the public who visit can see where they were located in context. The skeleton could have been displayed better but the site was still really interesting to see. After this the final visit was the Intermediatheque Museum which can be likened to the cabinet of curiosities seen in the UK, i.e. the Pitt Rivers Museum. It was quite interesting to see how the owner displayed the artefacts round the museum and is very different to the previous museums we had visited.

▶ Day 6 – 6th August

In the morning of day six we visited the Tokyo National Museum in Ueno Park. It was really interesting to see the military section in the museum which displayed samurai armour and katanas. My other favourite sections in the museum were the display of sliding screens and folding screens, the Edo fashion section and the Ukiyo-e in the Edo period. The museum also displayed an Egyptian archaeology special exhibition which was really interesting to me because of my desire to do a MA in Egyptology. The displays in all the sections of the Museum were well organised and set a good atmosphere. In the afternoon, we were given the chance to go see a kabuki theatre performance which was hard to follow at first but with the help of the English subtitles it became easy to follow. The experience was unique because it is not something you get to experience everyday so I really enjoyed the atmosphere and the experience.

▶ Day 7 – 7th August

We started day seven by visiting a special exhibition on manga, anime and games from Japan at the Suntory Museum of Art in Roppongi. The development of the manga, anime and games was organised very well and it was very interactive because of the games that were available to play. The next exhibition was based on contemporary art by Japanese and Korean artists was very intriguing but quite hard to understand the concept behind them if it wasn't for the guide that helped us understand the concept behind the art. It was fascinating to view and look round though. After this we went to the exhibition of the treasures of the Fujita Museum: The Japanese concept of Beauty. The layout of the museum was really organised and the audio guides really helped improve the experience of the overall exhibition. The artefacts were really amazing to view and were interesting to have the audio guide to give more information behind certain artefacts.

The final exhibition we visited at the Mori Arts Center was based on contemporary art designed by a Vietnamese artist who concentrates on the use of films and gathering information on the Vietnamese point of view on the Vietnam War. One of the main focuses in the exhibit was the use of helicopters and the attitudes towards it from the Vietnamese which was very mixed. It was fascinating to see the mixed viewpoints on this topic. The added displays of art and the uniforms from the Vietnam War helped create a good atmosphere which was a good accompaniment to the films. It worked out very well and was very enjoyable to view.

Hokkaido part

▶ Day 9 – 9th August

The first full day in Tokoro was spent at the excavation site of Oshima II site which dates to the Satsumon culture. We excavated the top soil off the fourth pit-dwelling settlement after receiving a small tour by Dr Kumaki Toshiro. He gave us a brief history of the site and showed us examples of pit-dwellings that had not been excavated yet and three previous excavated pit-dwellings. We excavated about 15cm deep leaving a cross section in the middle unexcavated to get a full view of the different layers of the topography. The only artefacts discovered from the day were one sherd of Satsumon pottery and one piece of obsidian flake. The soil in one section of the excavated area was a charred black colour which Dr Kumaki told us is probably the remains of the charred roof after the settlement was burnt down. It was fascinating to see how different Japanese archaeology was compared to archaeology taught in Europe. It was good to have found an artefact to get a close look at how the brush patterns looked on the pottery sherd. It was really enjoyable and would like to experience more Japanese excavations in the future.

▶ Day 10 – 10th August

On day ten we started off the morning with a lecture on prehistory in Hokkaido delivered by Dr Kumaki. He went into detail about the Jomon culture, the Epi-Jomon culture, the Satsumon culture, the Okhotsk culture, the Ainu culture and the Ainu archaeology. It was summarised that Hokkaido followed a different archaeological history to mainland Japan. Dr Kumaki went into detail about the food sources, the tools that were used in each period, the difference in the types of settlement and how different the material culture was. It was interesting learning about the Epi-Jomon culture which is only in Hokkaido and is in correlation with the Kofun culture on the mainland. It was too cold for rice cultivation in Hokkaido so the Jomon culture continued instead of changing.

In the afternoon we took a tour around the Tokoro Archaeological Museum in the Tokoro Historic Park which displayed all the local finds from the previous excavations done in the area. These were the obsidian tools, bone figures of sea mammals, antler tools, restored pottery pieces and other finds. Dr Kumaki gave us further information while going around the displays at the museum. After this the final activity we partook in was trying to search for pieces of pottery from past excavations and seeing if we could find any of the same pot. We found a few of one piece of pottery but it was very hard to find ones that went together. It gave us the perspective of how hard the process of restoring the pottery is.

▶ Day 11 – 11th August

We started the day off with getting a brief history on magatama beads. They were grave goods in the Jomon period and were usually made out of Jade and Jadeite which came from Itoigawa, the best known source of jade from eastern Japan. Whetstones were used to make the shapes of the beads and the whetstones had powdered jade on it to help shape the magatama beads. We got given talc and four pieces of sandstone to make our own magatama bead necklaces which was a fun activity and gave us an idea of what it was like for the Jomon people creating these beads.

We were then given a more in depth introduction to the Oshima excavation site as well as a further brief overview of the other archaeological excavation sites on Hokkaido. We were told that there are 3000 pit-dwelling remains on the island and around 2000 of these were dated to the Satsumon period. The focus of this lecture was on the Oshima sites; the first site having 169 pit-dwellings and being based in the east while the second site was based in the east and has 58 pit-dwellings with 3 being excavated. More detail was given on the materials of the pit-dwellings and what finds were recovered from the previous excavations such as carbonised wooden planks and plant fibres. We were also told about the structure of the inside of the pit-dwellings. This was really interesting to learn about and helped give us an overall perspective of the archaeology of Hokkaido.

The final activity we did was take a tour of some of the reconstructed pit-dwellings in Tokoro Historic Park which Dr Kumaki gave us more information on. We got to see the inside of the structure and saw how the inhabitants would have lived. Dr Kumaki gave us details such as where the oven would have been placed, where the hearth was and what it was

used for, where the inhabitants would have slept etc. It helped to see the reconstruction so we had a physical visage of the settlement.

▶ Day 12–12th August

The first place we visited was the Wakka natural flower garden by Lake Saroma and the local Tokoro Museum. The Museum was closed but we walked along the shore of the lake. After the Wakka natural flower garden we visited a forest area where there were the remains of two wide pit-dwellings and we got some more information about them from Dr Kumaki. We visited a shell midden which consisted of oyster shells and plum shells. The land where the shell midden was private so it was not made into a historical landmark. It was really interesting to see the compact shell midden and how it has a sign explaining about the site. After this we visited a salmon trapper which blocks the salmon from being able to go up the river. We learnt that they take the eggs out of the female salmon, raise the babies in a nearby building until they are old enough and they get released back into the river. A Chasi was visited after this which belongs to the Ainu culture and next to this were two pit-dwellings. While we were on the site pottery and obsidian were constantly on the surface because of the recent rain in the area. It was fascinating to see the different pottery types and the different obsidian flakes in the area.

In the afternoon we visited the Tonden History Museum in Yubetsu-cho which was fascinating because it told the history of people from mainland Japan being sent to Hokkaido to become farmer-soldiers. There were certain requirements that had to be met to become a farmer-soldier but the state paid for all of the equipment and provided you with a house. Other people who moved to Hokkaido during this time had to build their own house and bring their own belongings up to Hokkaido. They had a reconstruction of one of these houses in the museum which was interesting to see and they had all the equipment which the state would have provided on display. If the farmer-soldiers could cultivate their land successfully for five years then they were given the piece of land. They also had a collection of the different shoes which the inhabitants of Yubetsu-cho would have used in the winter. They showed the evolution of technology during the 1960's to modern times which was quite an interesting final touch. It was a really enjoyable visit and was fascinating learning about the history of the area of Yubetsu-cho.

▶ Day 13–13th August

In the morning we received a lecture by Dr Ilona Bausch who covered how Jomon archaeology was perceived in modern society in Japan and how it was used to promote tourism and a national identity. We learnt about Sannai Maruyama which could be known as the “Jomon capital” because of the mass amount of artefacts that were recovered while they were excavating the area to build a baseball stadium. It was interesting to learn that many festivals are held to promote the Jomon culture and how many artists are influenced by the Jomon culture. We see hybrid art pieces and recreations of the Jomon pottery being produced. The Jomon culture seems to have become a national pride for some areas in Japan with the Dogu figurines being called national treasures. It was fascinating to learn how Jomon archaeology is being perceived in modern society and how most archaeologists seem happy with the attention given to the Jomon culture. After this we were given the afternoon to finish off the reports and then we had the completion ceremony in which we were rewarded with certificates for completing the two week course.

Tokyo part

▶ Day 2–2nd August

To start day two, Prof Hiromi Shitara gave us a brief but informative lecture, giving us an overview of Japanese history, specifically during the so called ‘Primitive’ period which included the palaeolithic, Jomon, Yayoi and Kofun periods in Japan. This was concluded with a lecture about the characteristic dogu figurines of the Jomon and Yayoi period, as well as the haniwa statuettes of the Kofun. We then visited the secret university collection, which was quite the cabinet of curiosities. It consisted of artefacts such as Ancient Chinese oracle bones, haniwa, Moche pots, glass from Pompeii and a cuneiform tablet. Prof Shitara also introduced us to the black history behind some of objects on display. It was quite incredible to find that this secret collection is completely unknown to most Todai staff and students although collaborations have been made with the engineering and museology departments to help conserve the objects and also to display them optimally. This then lead us to do our period based group presentations based on Prof Shitara’s lectures. This enabled us to fully engage with the information that we had learnt and establish a stronger relationship with the other students. After having lunch at a Sumo-themed restaurant in Ryogoku, we visited the Edo-Tokyo museum. I found the displays to be very thoughtful and engaging, including lots of miniature scale models of the streets of Edo, through to the Meiji and Showa periods in Tokyo. This effectively helped us to picture the locations and life styles of the people of these times with greater awe and reverence. Day two was a great introduction to Japanese archaeology overall, and it was great to experience the splendour of Japanese museums to help put all of the lecture information in context.

▶ Day 3–3rd August

On day three, we took a train ride to the historic town North of Tokyo called Nikko. It is famous for being the place where Tokugawa Ieyasu, the Shogun who started the Edo period, lived and was buried – Nikko is now a shrine to his success. At the time of our arrival, reconstruction was taking place on some of the main temples on the lead up to next years 400th anniversary since Tokugawa Ieyasu’s death. Nikko has the most remarkably ornate and beautiful temples and shrines from the time of the Tokugawa Ieyasu’s residence here and has been well restored to maintain its grandeur. During this visit we were joined by Dr Ilona Bausch from Todai University who introduced us to the long standing trade relations with the Dutch in order to help us see the significance of the bronze offerings from the Dutch to the Tokugawa family in the Edo period. After having visited the splendid Chinese style shrine to Tokugawa Ieyasu and the Buddhist temple of the crying dragon, we entered the shelter under which the reconstruction was taking place. We found that despite the monumental effort that it takes, the new frames for the temple are being built using joints instead of nails so as to keep with the original construction method and reduce causing any irreversible damage. This trip to Nikko was a wonderful reminder of the significance of the Shogun in Japan, even today and that Japanese people still feel connected and thankful to their ancient leaders for making Japan what it is now.

▶ Day 4–4th August

Our tour on day four, took us to a historic area in Tokyo, Yanaka, near to Ueno where we were staying. One of the main features of this visit was one of the largest cemeteries in all of Tokyo, which is prestigious for its large number of famous buried individuals. It was interesting to see the difference between graves in Japan compared to the West, with these graves favouring a very natural form of grave stone and small walls to separate one individual from another. The long thin planks of wood that beset many graves, known as Sotoba, are a way of depicting a stupa, which are known for being places that contain the remains of the Buddha, but these planks are an easier and cheaper way of doing so for themselves. Due to the intense heat, we spent much of the rest of the day between buildings, visiting two yōkai or ghost exhibitions. Dr Akira Matsuda made mention that scary things are in season for summer due to the fact that being scared helps to give you the chills in the summer heat, and so yōkai are a common theme at this time of the year. The second of the exhibitions featured an Enchō collection of art works and beautiful Noh masks from the Edo period with explanations about the transformations that were taking place in the individuals in the stories. We spent the rest of the afternoon in the Tokyo

Science Museum, which featured an exhibition on the Ancient Japanese people and the Environment from palaeolithic to Edo. Since all of the text was in Japanese, I didn't fully understand everything, but the imaginative displays and chronological progression of people through time helped to give us a good enough understanding of the way that Japan has changed through time.

► Day 5 – 5th August

On day five, we travelled to the Shibuya district of Tokyo to visit the Kokugakuin University Museum joined by Dr Bausch. Upon arriving we were pleasantly greeted by the curators and given a personal tour of their archaeological collections, with artefacts spanning from Shintoism, Jomon, Yayoi and Edo, as well as a small collection on the history of the founder of the University and museum itself. The selection of artefacts on display for each were incredibly thoughtfully presented, and included drawers of examples of Jomon cord wrapped pottery, according to Yamanouchi Sugao's typologies. After a lunch break, we travelled to the distant district of Todoroki in order to experience seeing a real Kofun mound. It was wonderful to be able contextually put the Kofun mound into scale and get an idea for the way that they were constructed and walk around the platforms. At the top of the mound could be found some information regarding the configuration of the burial of this Noge Otsuka mound, which also included a visual of the finds in context where they were found. On returning to our hotel in Ueno, we stopped off at Tokyo Station to visit the nearby museum, Intermediatheque. Inspired by Quai Branly, it was a visual, cabinet of curiosity type of museum with natural science, anthropological and historic collections. I found the displays to quite effectively allow us to engage with the objects from a fresh perspective without being bombarded with information and it instead invites you to think for yourself. I was not entirely impressed with the way that parts of it were displayed as though they were insubstantial pieces of art but I found it quite refreshing compared to the usual museum environment. Overall, day five was very useful for building on what we had already learnt on Prof Shitara's lecture on day two about Japanese archaeology, giving us the opportunity to see artefacts from Jomon, Yayoi and Kofun as well as visit a Kofun tomb personally, that were discussed as the most characteristic aspects of the Kofun period. The visit to Intermediatheque, although not archaeologically relevant like the rest of the day, did help to break up the long travel back to Ueno and gave me a new perspective on museum displays.

► Day 6 – 6th August

On the morning session of day six we spent a short time at the National Tokyo Museum in Ueno Park. This museum is known for being the largest museum in all of Japan, consisting of art and archaeology not only from Japan but all of the world. The key exhibits that we had time to visit included those of ancient Japan, featuring Jomon, Yayoi and Kofun masterpieces. This was followed by magnificent works on early Buddhism as it arrived in Japan, followed by the time of war which consisted of many spectacular armours and katana of this period. In another building, we found ourselves in the Asian Art gallery, which had works from Egypt to China, vastly focusing on religion. Overall, I was very impressed by the scale of the collections on display at the National Tokyo Museum, but due to lack of time, we were unable to appreciate the archaeological collection. Our afternoon was set as free time, but we were all given the option to see a Kabuki show in Ginza, which I chose to join in with. The show itself was subtitled so that we could understand the story, and it was an amazing experience to be able to appreciate the great acting of the cast and effort put in to create a classically Edo atmosphere throughout. Although the story got a little complicated, it was well broken up to have story in the beginning and action throughout much of the rest, which gave the show extra dynamism.

► Day 7 – 7th August

Day seven, our last day in Tokyo, was spent in Roppongi, an extravagant part of Tokyo. Here we were joined by an art history professor from Todai University and a post-doctoral student also in art history. Our first stop was at the National Art Centre and our first exhibition visit was about manga, anime and games in Japan since 1989, and it opened our eyes to the pride that the Japanese hold for their worldwide success in this area of popular culture. In the same complex, we visited a contemporary art gallery with works from various Korean and Japanese artists. I would never normally go to a contemporary art gallery, but it was interesting to see the different ways that they could express their creative imagination

to the audience, each taking very different approaches. After taking a short walk, to the Suntory Museum of Art we visited an art exhibition featuring pieces from the collection from Fujita Museum, with emphasis on beauty in the Edo and Meiji period. We were guided through the displays initially with a very Buddhist theme, including calligraphic art forms and poetry, which featured the magnificent painting, Genjō Sanzō' e, and prized the tea bowl with Tenmoku glazing as the centre piece of the collection, a very rare type of bowl among four found nowhere else in the world. This visit was followed by a stroll to Roppongi Hills, a huge towering edifice which has its top three floors reserved for exhibitions and sky decks for viewing Tokyo from above. The exhibition featured at this time in the Mori Art Centre was by Dinh Q. Lê, telling the story of the Vietnamese war and its long term effects on the Vietnamese people, focusing on their social and political struggles. I found the whole exhibition very imaginative and it convincingly conveyed the true feelings of the people of Vietnam, America and even Japan about the subject. We then went to the Sky Gallery on the 52nd floor, and enjoyed wonderful views of Tokyo with very strange themed displays to aid our enjoyment. Although I did very much enjoy the day visiting art galleries, my interests do not necessarily lie with what we visited, especially that of the contemporary art exhibition, which was very confusing at times.

Hokkaido part

▶ Day 9 – 9th August

Our first day in Hokkaido led us to the Oshima II archaeological site in Tokoro where we prepared to do a full days archaeological excavation of a pit dwelling from the Satsumon period. Before starting the excavation Dr Kumaki Toshiro gave us a brief tour of the site and gave us relevant information about its context in this area. For the excavation itself, we used Mortimer grid system, using crossed threads through the centre of the pit to make the sections clear. We then started carefully shovelling away the top soil down to about 30cm to find the pit floor. As the ground was very heavily rooted by trees and plants, we had some difficulty keeping the bottom level even throughout but one member of the team did manage to find a single potsherd in the material removed. We took lots of breaks throughout the day due to the heat and mosquitos. Once the excavation for the day was complete, Dr Kumaki debriefed us, notifying us that he found that the soil was much darker to the east side of the pit dwelling, which he suggested was a sign of burning in that area. He also noted that the soil was lighter to the far western side which he related to the removal of soil by the people who built the pit in order to excavate the hole that made up the pit dwelling. It was great to experience archaeology in a different country in order to see the differences in approaching the excavation and its common practices. I found that Japan is less safety conscious than the UK, but the techniques that they incorporate are very efficient for their needs. Using the Mortimer grid system for excavating the sections of the pit dwelling for example, was more ideal than full excavation for the scale and configuration of the finds and it also helped to divide labour and save time where people would otherwise been unsure of the boundaries of the pit.

▶ Day 10 – 10th August

To start the morning at 5:30am we were given the rare opportunity to join a local fisherman, Nagata-san, on his fishing boat so that we could enjoy fresh scallops plucked from Lake Saroma and first hand experience the way of life of the fishermen in this area. To be able to experience this was incredible and we were given insight into the ways that the fishermen operate without destroying the ecosystem of the lake and GPS coordinates were assigned to individuals as to the parts of the ropes that belonged to that person to harvest. Later in the morning, a lecture about the archaeology of Hokkaido was given by Dr Kumaki to give us a broad overview of archaeology here from the palaeolithic to the Ainu Period. We then made a short walk to the Tokoro Archaeological Museum which helped to put the artefacts from the time periods discussed in the lecture into perspective. In the afternoon session, we joined Dr Kumaki in reconstructing pottery from pot sherds. It was wonderful to be able to given the opportunity to try to make these reconstructions with specialists in the Jomon era, who taught us to first separate each sherd into its particular pattern type and then attempt to start from

the rim or bottom of the pot, much like with a Jigsaw in which you would start from the edges. After this, we were given a brief tour of the archaeological collection on display at the laboratory. It was interesting that it would include a behind the scenes visit to the area where many different kinds of woods were being preserved in water in large vessels for further analysis. The day was concluded by a visit to a nearby museum, normally closed to the public, that was once a primary school for the local children. It was left much preserved from its school days, boasting old posters and blackboards, but more recently, a collection of objects from old times have been stored in each of the rooms, giving the place a sense of nostalgia for the Japanese who joined us – young and old.

► Day 11 – 11th August

During the morning session of day eleven, we had a brief talk about magatama (comma-shaped beads) before we had the opportunity to make some ourselves. We were given talc, a stone with a hardness level of 1, to help us to sand down the stone to get the right shape and polish. It but only helped us to appreciate the time and effort that must have gone into making these beads from materials like jade and agate which have a hardness of between 6 and 7 in the Jomon era with whetstones. To start the afternoon session, we had a tour of the Tokoro Historic Park in which we were staying, which took us within 5 minutes walk of the fieldwork station. Dr Kumaki showed us around some of the reconstructed pit dwellings of the Satsumon period and showed us inside to give us a feel for the lives that the Satsumon people would have lived, which were surprisingly comfortable. The tour was followed by a visit to the Tokoro Forest Park Museum of Archaeological Sites where a number of remarkable artefacts were on display, including a carved sea otter figurine which could be seen cracking open a clam with a stone on its belly. On returning back to the laboratory, Dr Kumaki gave us a lecture about the Oshima sites, which helped to give us a better idea of the area in which we were excavating and the kinds of finds in different types of pit dwellings, showing how much the practices this area have changed over time. As we still had time to do something else, we were driven to the Tokoro Curling Hall, which is a sport well-known in this part of Japan, with a strong team that played in the Olympics on numerous occasions. In the spectators theatre, they had thoughtfully added information boards in English and Japanese about the history of curling and its success in Japan, which I learnt much from, having had limited knowledge of curling beforehand. While here, we were able to watch teams prepare for their matches which was interesting to watch how they practice sliding with cones as targets to give them a goal to execute a perfect initial release of the stone.

► Day 12 – 12th August

Although we had originally intended for this day to be for further archaeological excavation, due to the high chance that it may rain, we decided to make visits to various archaeological sites in the Tokoro area. To start the day, we took a brief stop at the local Wakka Nature Centre where we could enjoy incredible views of Lake Saroma. We then visited a nearby forest full of pit dwellings from the Satsumon and Okhotsk periods. Unfortunately these pits are little known by the public and sadly few people visit this forest to appreciate the history of this area. Following this, we drove to Tokoro shell midden, one of the main shell middens in the Tokoro area, containing clams and oyster shells which were still on view as part of the site. Nearby, we were also able to witness a local salmon fisherman at his business at a salmon trapping barrier system. After another short drive, we found ourselves at a Chashi hill fort from the Epi-Jomon period in which we were able to investigate through the wild brush in the garden of a family home. Fragments of obsidian and pot sherds were visible on the surface for us to pick up and leave aside for future archaeologists to document at a later date. Our archaeological tour was concluded with a brief visit to the main beach in Tokoro on Lake Saroma where we enjoyed a paddle in the sea. During the afternoon session, we went to the nearby town of Yubetsu to visit the historic museum of the area, which concentrated on the creation of the local towns during the Meiji period, when many Japanese from across Japan moved to the island of Hokkaido to establish new territory. The architecture and displays were very well thought out and imaginatively portrayed to enable us to fully engage with the troubles of the people and the lifestyles of those who made the migration and their offspring. It was great to be able to spend the day physically seeing these sites and gaging with the manner in which they are and are not accessible to the public.

▶ Day 13 – 13th August

In the morning session of Day 13, Dr Ilona Bausch gave a lecture on Jomon archaeology and its place in modern society and identity in Japan. I liked how Dr Bausch emphasised the material culture and included lots of examples of festivals, archaeological sites, publications, films and anime along with merchandise that she has picked up on her travels in Japan that truly show the spirit with which Japanese people acknowledge their ancient history with objects made relevant to their modern lives. Dr Bausch's lecture was a great conclusion to the programme, which put everything we had learnt into a relevant context for the modern Japanese and showed how much the archaeology has truly impacted on Japanese identity over time.

Tokyo part

▶ Day 1–1st August

The University of Tokyo's Summer Program, in Japanese Archaeology and Heritage, began with a warm welcome by the staff involved in the summer-school, at the University of Tokyo Hongo campus. Following this, the group made its first historical visit in Japan, to the district of Asakusa. There, we visited the Buddhist Senso-ji Temple. It is notable for being one of Tokyo's oldest temples, with astonishing architecture. It certainly provided a wonderful initial step into Japanese culture and heritage.

▶ Day 2–2nd August

The second day began with a riveting lecture, by Prof Hiromi Shitara, that introduced us to Japanese prehistoric archaeology. As I had no previous experience, with the archaeology of Japan, this was a wonderful opportunity for me to gain a broad overview and to become familiar with the cultures that I would be learning about in the next two weeks. Following this, Prof Shitara presented a lecture on clay figurines in the Jomon and Kofun periods. I was particularly intrigued by the intricate dogu clay figurines, from the Jomon period, some of which represented exaggerated female forms and included images of child-birth or child-rearing. These possible "fertility" statues, I felt, were very much akin to the Upper Palaeolithic Venus figurines in Europe. The afternoon was spent visiting the Edo-Tokyo Museum. As the name suggests, this museum educates visitors on the history of Tokyo from the Edo period onwards. This museum is highly interactive, uses multiple mediums to communicate its information and has some fantastic recreations of Edo architecture. I was particularly interested in the displays detailing the transition to the Meiji period, particularly its rapid adoption of aspects of western culture.

▶ Day 3–3rd August

On the third day of the programme, the group visited Nikko, specifically the Nikko Toshogu shrine. This shrine was constructed by Tokugawa Hidetada as the final resting place for his father, Tokugawa Ieyasu. I will admit I was utterly taken aback by the exquisite detail of the shrine's design. The visit was particularly informative as it coincided with a significant renovation project that is occurring at the shrine, as part of the 400th anniversary of Tokugawa Ieyasu. This meant that the group was treated to a rare view of how such renovation is carried out, including the use of traditional building methods which tend to use wood pieces which fit tightly together, rather than using a lot of nails. The Nikko Toshogu shrine is part of a wider complex, this was interesting to discover as it highlighted the polytheistic nature of Japanese "religion", which includes Shintoism and Buddhism.

▶ Day 4–4th August

The fourth day of the programme began with a visit to various locations in Yanaka. Yanaka, I am told, was an area in which common people lived in the Edo period. This area is particularly notable in that it has rather narrow streets which are, I believe, a throwback to this period. A trip to Yanaka cemetery was made, where we were able to see the grave of Tokugawa Yoshinobu, the fifteenth and last shogun, marking the end of the Edo period and the shogunate power. We were also about to explore the Natural Museum of Nature and Science, an extensive museum which included an interesting exhibition on "Japanese People and Nature". These series of displays looked at the history of Japan from the first inhabitations of the islands onwards. I was particularly struck by the central case which had a series of models depicting people from the Palaeolithic to the modern day. The final glass-case, illustrating the modern period, was empty allowing you to step inside and become part of the exhibit. I thought this was rather charming and perhaps helps visitors to feel a connection to the past inhabitants of Japan. The dress and activities represented in this central display were also interesting in terms of what ideas they were presenting to the public with regards to, in my view, a stereotypical gender division of labour and perhaps an evolutionist idea about human development.

▶ Day 5 – 5th August

The fifth day of the summer school involved an excursion to the Kokugakuin University Museum, where we were warmly welcome by the museum staff. The university is one of only a few in Japan where, after a period of study, a license can be obtained to practice Shintoism and as a result the adjoining museum had a highly informative exhibition on Shintoism. In addition, the museum also features displays on the history of the university museum and Japanese archaeology. I was particularly fascinated to discover that some of the earliest pottery in the world has been discovered in Japan. For example at the site of Odai-Yamamoto, in the Aomori prefecture, 16,500 year old pottery fragments have been discovered. The museum is also currently engaged in a rather interesting pottery project. They are currently trying to match the pottery within their collection to the highly diverse array of decorative patterns that have been identified from the Jomon period. The catalogue of these “cord markings” was established by Yamanouchi Sugao. In the afternoon, a visit was made to the Noge Otsuka kofun. This consisted of a large-sized scallop-shaped tomb and a central tomb mound, from the Middle Kofun period (approximately 5th century). The kofun was shaped like a keyhole, which is a supposed indication of an affiliation with Yamato. Four individuals were interred in this kofun and the grave-goods associated with these individuals included magatama beads, metal arrows, spears and swords. It was interesting to note that modern productions of Haniwa pottery had been placed around the bottom of the kofun mound, an active engagement of the Japanese people with the past.

▶ Day 6 – 6th August

On the morning of the sixth day, we visited the Tokyo National Museum. Whilst exploring the museum’s large collection I was particularly drawn to a Haniwa figurine, from the Kofun period, which was in the shape of an elaborately dressed woman. I thought that this figure was a wonderful way of gaining an insight into the possible attire of the Kofun period people. Although of course, considering that Haniwa were tomb ornaments it is possible that the attire represented by such figures were formal, rarely worn, attire. I was also rather amused to see that it was possible to purchase Haniwa plushies, a fun insight into how archaeology is commodified and presented. The exhibit on Noh Masks was also highly enjoyable and provided an enjoyable taster of Japanese theatre, prior to a visit to a Kabuki performance later that day. We were treated to a viewing of the play Sakaro. I was in awe of the painstaking effort that must have been put into the scenery and costumes and was surprised to find that all the female characters were played by males, akin to traditional performances of Shakespeare’s pieces.

▶ Day 7 – 7th August

The seventh day involved an exploration of Japanese art, both modern and historical pieces. The first gallery we visited, my personal favourite, exhibited Japanese pop-culture, specifically manga, anime and games at the National Art Centre Tokyo. This was especially enjoyable for me as such media has played a significant part in my childhood and even to this day provides me with much entertainment. Another gallery which I was particularly enthralled by was that of the Suntory Museum of Art. This museum provided a fitting compliment to the contemporary exhibits we visited that day. The museum was currently holding an exhibition on “Treasures of the Fujita Museum: The Japanese Conception of Beauty”. The central piece of this display was the Yohen Tenmoku Tea Bowl, a designated National Treasure. It was a real treat to view such an exquisite piece.

Hokkaido part

▶ Day 9 – 9th August

Our first activity in Hokkaido was to take part in the excavation of the Oshima II site. This site consisted of a series of pit dwellings, dating from the Satsumon culture (approximately 900 years ago). Tokyo University has been excavating this site since 2009 and so far has completed the excavation of two such dwellings and partial excavation of a third. Our task was to start excavating a fourth pit dwelling. We had to remove approximately 30 centimetres of topsoil before we

reached a black, ash layer thought to be the possible remains of the burning of the pit-dwelling, after it was abandoned. Much to our excitement, whilst excavating, a few fragments of Satsumon pottery were also discovered. It was particularly interesting for me, as a European archaeology student, to examine the manner in which Japanese archaeology is carried out. For instance, I was intrigued to learn that a “cross-belt” section is typical for viewing the stratigraphy of a feature in Japan. In contrast, it is usual with such circular features, as pit-dwellings, in Europe to half-section them.

▶ Day 10–10th August

On the second day of the summer program in Hokkaido, a lecture on the prehistory of Hokkaido was presented to us by Dr Toshiaki Kumaki. It was particularly interesting to realise that Hokkaido had an Epi-Jomon period from approximately 500BC to AD600 and that the Yayoi culture did not reach Hokkaido. In the afternoon, the group was able to have some more “hands-on” experience with Japanese material culture. We were asked to attempt to re-fit some Jomon pottery from the Tokoro River Mouth site. This task allowed us to practice a vital skill for any archaeology student and encouraged us to think about the similarities or differences between the fragments, in terms of thickness, inclusions, pattern colour etc.

▶ Day 11–11th August

The group was able to engage in further practical activities on the third day, of the program in Hokkaido, by making Magatama beads. These beads are known from the Jomon period to the Kofun period and are an iconic piece of material culture in Japan. The oldest Magatama beads are made of talc and the students were each given a piece of talc and sandpaper to create their own bead. This activity certainly gave one an appreciation of the skill which is involved in the creation of each piece. Following this, we went on a tour of Tokoro Archaeology Park and saw the recreation of several Satsumon pit-dwellings which had been excavated there. The recreations really helped to put into context the soil depressions, the remains of the pit-dwellings, which we had been excavating at the Oshima II site.

▶ Day 12–12th August

On the fourth day of the Hokkaido program we visited a number of local archaeological sites. At the Tokoro Historic site, we were able to view not only Satsumon pit dwellings but also those of the Okhotsk, the latter being substantially larger in size. It was rather sad to hear that this area is often unknown to both tourists and the resident population, although previous attempts have been made to convert the area into an archaeological park. The next visit was to the Tokoro Shell Mound. This was particularly interesting as it not only provided information regarding the diet of the Jomon people, but also informs us about the comparatively warmer climate 4,000 years ago, indicated by the presence of clams. Following this, we visited the Tokoro Chasis, a ditch fort used by the Ainu people in the second half of the 17th century. This site was particularly thrilling as a large number of Epi-Jomon pottery was visible across the surface of the area. The final trip was to the neighbouring town of Yubetsu and their museum. This museum had a particularly interesting exhibition on the notion of “farmer soldiers”, and their accompanying families, who were sent, in the 19th century, to Hokkaido, from Honshu, in order to “develop” the land.

▶ Day 13–13th August

The fifth day of the Hokkaido program was the official end of the summer school, although on the following day we would be visiting the city of Abashiri. We received a fascinating lecture from Dr Ilona Bausch about the influence of the Jomon culture upon modern day Japanese society. It certainly seems to be the case that many Japanese people feel a significant connection with the Jomon period, particularly with reference to their supposed peaceful nature. This affiliation can be seen in such facets of Japanese society as anime, literature, festivals, fashion, manga, art exhibitions, and craft workshops. The remainder of the day was spent report-writing and culminated in a delightful certificate ceremony.

I would like to extend my deepest thanks to the staff that organised this wonderful summer program. I have certainly formed a lot of wonderful memories and am incredibly grateful for this rare opportunity to gain insight into Japanese heritage and archaeology.

Tokyo part

▶ Day 1 – 1st August

On our first day we met at the University of Tokyo Hongo campus, introduced ourselves and received a short introduction to the program. In the afternoon we had plenty of time left, so we went to Asakusa and visited a temple in Ueno Park, having a glimpse of the historic buildings near our hotel. After dinner in our free time we went to a karaoke bar near Ueno station to get to know each other.

▶ Day 2 – 2nd August

After breakfast we went to the University of Tokyo Hongo Campus to attend a lecture by Prof Hiromi Shitara, who introduced us to the archaeology of Japan. He clarified the difference between the prehistoric periods in Japan, such as the Palaeolithic, Kofun, Jomon and Yayoi periods, and explained the Satsumon culture. Although I had already heard a bit about these periods the lecture provided me with much new information. After the lecture we were divided into three groups to prepare for short presentations on the Jomon, Yayoi and Kofun periods. My group had to present the Kofun period in detail. During the preparation for a 5-minute presentation we received a lot of new interesting information. At first the tutors thought about deciding on the winner group that presented the best presentation, but since every presentation was completely different they decided to call all three groups winners. After the presentations we saw collections of the Archaeology Department, which consisted of Japanese, Korean and Chinese archaeological finds exhibited next to South American and Egyptian finds. It was a great opportunity to see these collections because they are not usually open to the public and included many interesting objects. After lunch we went to the Edo-Tokyo Museum. The museum was really impressive because of the effective use of reconstructions and the contrast between the Edo period and Japan during the industrial evolution.

▶ Day 3 – 3rd August

We visited on our third day a historic place called Nikko. After the long train ride we had an breath-taking view of a shinto shrine. The colors and the details in the ornaments were very beautiful. Although we spent the whole day there and my feet were hurting I wished I could stay longer. After the visit of the shrine we also tried some delicious local food.

▶ Day 4 – 4th August

In the morning we visited a big cemetery in Yanaka, which has existed since the early Meiji period. It was the biggest and I think also the oldest cemetery in use that I have ever seen. Due to many students' interests in Japanese yokai we walked to an art exhibition about yokai art at the Tokyo University of the Arts. On our way we found another small exhibition on the same topic held in a Buddhist temple. I had never seen any old yokai paintings, and thought that this genre is very fascinating. On the same day we also visited the National Museum of Nature and Science, which was so big that we were able to see only a half of it. Due to the heat outdoors, a visit to this museum was much welcomed.

▶ Day 5 – 5th August

On the fifth day we first visited the Kokugakuin University Museum. The staff from the museum gave us a very warm welcome. They gave us a well informed guidance about the museum and a lot of infomaterial. After lunch we went to Noge Otsuka Burial Mound and Todoroki Valley Park. Both were impressive in different ways. Afterwards we visited the Intermediatheque near the Tokyo station. It was a fascinating exhibition where animal bones were exhibited next to paintings and artefacts.

▶ Day 6 – 6th August

On Thursday we visited the Tokyo National Museum in the morning. I really liked the exhibited samurai swords and armours and also calligraphic works. In the afternoon we went to a Kabuki theater where we had an insight into

traditional Japanese intangible heritage.

▶ **Day 7–7th August**

In the morning we visited the National Art Center and the Suntory Museum of Art, and in the afternoon the Mori Art Museum. In the National Art Center there was an exhibition on anime, manga and games, which I really liked.

▶ **Day 8–8th August**

We flew to Hokkaido on this day and had our first day in Japan far away from skyscrapers and with beautiful nature.

Hokkaido part

▶ **Day 9–9th August**

Due to the adverse weather forecast we started our work of archaeological excavation sooner than originally planned. At Oshima II site we excavated a pit dwelling. It was very interesting to see how excavation techniques can be different in different countries. Because it was really hot and dry on that day, the work was exhausting. Even though we only found two pieces of ceramic, I greatly enjoyed the whole process.

▶ **Day 10–10th August**

In the morning we listened to an interesting lecture by Dr Kumaki about the prehistory in Hokkaido, from which we learned many details about local prehistory. Afterwards we saw collections of local folk culture housed in an unused primary school. The collections consisted of a variety of objects and I had a feeling of treasure hunting. On this day we also tried to refit pottery pieces. Every table had a stack of pottery pieces from an archaeological context and we had to find pairs. I enjoyed this refitting work, because I like practical work and also because we were able to handle archaeological finds directly.

▶ **Day 11–11th August**

In the morning we made magatama beads. It was interesting to see how each of the beads we made had a slightly different shape, and despite that all beads could still be called magatama. Before the making of magatama beads we had a lecture about excavated sites in Hokkaido. We also took part in a guided tour around the Tokoro Fieldwork Station and saw reconstructed pit dwellings. After the guided tour we visited the Tokoro Archaeological Museum, which was next to the Tokoro Fieldwork Station. The replicas we saw at the guided tour and in the museum were really impressive and very detailed.

▶ **Day 12–12th August**

We went to see several pit dwellings of the Satsumon and Okhotsk cultures in the morning. It was interesting to note the difference of pit dwellings from the size of the depression. We then went to see a shell mound of an impressively large size. We also visited a fort of the Ainu culture and a museum in a neighbouring town, Yubestu. I liked the museum because I learned much about the local history of a village in Hokkaido. We also went to the Saroma Lake and saw a local fisherman preparing for catching salmons.

▶ **Day 13–13th August**

In the morning we listened to a detailed presentation from Dr Ilona Bausch about the modern Japanese society and its association with Japanese archaeology. Especially the part about the festivals with Jomon background was very interesting.

東京の部

▶1日目-8月1日

東大本郷キャンパスの文学部の教室で気まずい顔合わせの後（海外からの学生同士が英語で話していて、とても話しかけることができない）、浅草散策へ。炎天下、仲見世通りの観光客向けの道を歩く。雷門の有名な赤提灯の底面の龍の木彫りが精巧で印象的である。浅草寺の本堂の天井画を見ると、天女と思いき絵は近年のもののように明らかに安っぽい、龍の絵の方は古くあるもののように玉に金箔を使うなど面白い。上野ターミナルホテルに入って豪華な夕食をとり、その後参加学生全員でカラオケへ。海外からの参加者が皆アニメに非常に（一定分野に関しては参加していた日本人よりも）詳しく、驚く。英語に関しては、一日目は打ち解けていないこともあってほとんど聞き取ることも話すことも出来なかった。

▶2日目-8月2日

午前中は設楽先生による考古学の講義があり、その後縄文時代・弥生時代・古墳時代についてそれぞれグループワークを行う。日本語で学習した内容を英語で伝えることに非常に困難を感じる。昼食は両国の店でとり、そのあと江戸東京博物館へ。この博物館は江戸地域に焦点をあてて江戸時代から現代までの政治、社会、文化について網羅したものである。特に面白かったのはその日偶然催されていた三味線と尺八の演奏会で、その独特の演奏法と音色には強い印象を受けた。その後福島君が尺八について興味深い言及をしていて、彼によれば尺八の伝統的な奏法にははっきりした音階が無く、音色の微妙な変化と音階の揺らぎのようなもの、そして拍節のみによって曲を構成すると言い、これらの諸要素は現代のノイズミュージックに繋がるものがあると言う。

▶3日目-8月3日

この日は日光へ向かう。東照宮と薬師堂と眠り猫を全て網羅したが、それらを鑑賞する中でも竹崎さんの解説が印象的だった。彼によれば東照宮の大量の浮き彫りには、多く中国絵画の題材が使われていると言い、特に鶴の浮き彫りに関しては探幽による中国絵画を参考としたものが多いらしい。その日は陽明門が偶然改修中であつたが、そこで新しく見つかったとされる鶴の壁画も中国絵画の形式を保ったものであると言う。またイローナ先生が触れた、オランダから幕府に贈られた燭台も興味深かった。この燭台は当時の朝鮮などからの贈答品と比べて明らかに技術的に高水準なものであるが、いかなる誤解があつたのか、葵の御門が上下逆さまに刻印されているのだ。International students とは1文、2文のコミュニケーションはとれるが、やはりある程度込み入った話になると上手く話せない。しかし松田先生の、うまく話そうとするよりは、アクセントを強調してわかりやすく話すことの方がコミュニケーションを成立させるために重要であるという助言は、非常に有用なものだった。

▶4日目-8月4日

まずは谷中の全生庵に向かい、幽霊画を見る。伊藤晴雨という画家の幽霊画が上手く、モダンな感じがして良い。この画家は責め絵（SMに関する絵）でも有名だそうなので、ぜひ見てみたい。そのあとは谷中霊園を歩きながら著名人の墓を見るが、日本人にはまだしも海外ではあまり著名でない人の墓が多い。霊園内で偶然蟬を間近で見ることがあつたが、ヨーロッパから来た学生は蟬を見ることが無いらしく、蟬の抜け殻を非常に珍しがる。その後、東京藝術大学大学美術館へ。ここでも幽霊画の展覧会「うらめしや〜、冥途のみやげ」展が催されていて、多くの幽霊画を見る。曾我蕭白の絵が非常に不気味で印象的である。藝大で昼食をとる。学食でタバコを売っているのが印象的である。その後、何度か来たことのある上野の国立科学博物館へ向かったが、猛暑の中での長時間の探索が祟り、ベンチでぐったりしているだけで終わってしまった。（一方 international students の方は精神的に動き回っていて凄い）この日は英語が上達したというよりは、相手の方が英語の不自由な日本人への対応を覚え始めていたせいで、ある程度のコミュニケーションが段々と取れるようになっていくように感じた。

▶5日目-8月5日

國學院大学の大学博物館へ向かう。この博物館には膨大な考古学資料が保存しており、特に縄文土器などの展示には圧倒される。特に土器の表面の文様とそれを刻むための縄の形を想定した展示が興味深い。また神道に関する展示も豊富で、解説もかなり充実したものであつた。昼食はそのまま國學院の綺麗で小洒落た学食でとるが、メニューがパスタばかりである。次に等々力溪谷と大塚古墳へ向かう。等々力溪谷は世田谷にある小さな溪谷で、川に沿って歩いているところが東京だと信じられない程自然が豊かである。またそこから程近い野毛大塚古墳にも見学へ行く。実際に古墳の大きさを見ると、古代の人々の

古墳に対する感触を再現できるような気もした。最後に東京駅近くのインターメディアテクへ向かう。ここは日本郵便株式会社と東京大学総合研究博物館が共同で運営するミュージアムで、日本の一般的な博物館・美術館とは一風変わった施設である。学術資料が美術品の如く美しく並べ立てられ、膨大な数の骨董品をため込んだ、信じられないほど広いアンティークショップの体を成して、ゴシック調のフィクションの中へと迷い込んでしまったかのような気分になれる場所である。その夜は幾人かの international students を連れて BOOKOFF へ。大量の漫画・ゲーム・CD が物珍しいらしく、Charlotte などは山ほどの CD の買い物をする。また英語を勉強するために、彼女らに勧められた FIGHT CLUB という映画を購入する。

▶6日目 - 8月6日

まずは東京国立博物館へ。日本画、浮世絵、刀剣、絵巻など面白いものはたくさんあるが、今回は時間が足りず竹崎さんの案内に従い重要なものだけ取り上げて見る。彼の解説を聞くと応挙の絵が一層魅力的に見える。童子を連れた郭子の絵が、お腹がやわらかそうで特に良い。そのあと、希望者で歌舞伎を観に行く。演目はひらかな盛衰記という木曾義仲の子分を主人公とした物語で、舞台の仕掛けや背景音楽などに面白い所はあるが、話の筋がセンチメンタルで大衆芸能たる所以と感じた。しかし自分以外には概ね好評だったようだ。夕食後、international students の強い希望で監獄レストラン・ザ・ロックアップへ。目玉の形をした料理や、色鮮やかなドリンクなど、彼女らは非常に面白がっていたので良かった。でもグロテスクな話を、身振りを交え真に迫ってするのはやめて欲しい。

▶7日目 - 8月7日

まずは国立新美術館のニッポンのマンガ*アニメ*ゲーム展へ。International students には非常に評判が良い。しかしながら一方で、この展覧会は海外観光客に向けたものと言うよりは、国内のコアなマンガ・アニメ・ゲームファンに向けたものだということがよくわかる展示であった。例えばアニメで言えばドラゴンボール、ワンピースなどの展示はなく、代わりに fate、攻殻機動隊、青の6号など日本人でもごく一部しか知らないようなものの扱いがとても大きい。私は今敏監督の展示があったのがとても良かったと感じた。またそのあと、同じく新美術館で開催されていた隣の部屋展を見る。ヤン・ジョンウクの動く巨大な構造物の展示が面白い。美術史を専攻している舟木さんの作品の見方が斬新である。更に移動して森美術館のディン・Q・レ展へ。レはベトナムの著名なアーティストで、フォト・ウィービングシリーズなどが有名。東南アジアの作家の展覧会に行くことで、日本での体験を日本文化に限ったものではなく、近接する東アジア・東南アジアに対しても関心を持つようにとの意図があると聞いた。そして最後にサントリー美術館へ曜変天目茶碗を見に行く。碗の中には銀河がある、高岸先生の前宣伝を上回る美しさだった。その日は夕食後に Lauren と竹崎さんと私で進撃の巨人の実写映画を見に行く。普段なら絶対に見に行かないような映画だったが、それが逆に新鮮でよかったように思う。

北海道の部

▶8日目 - 8月8日

いよいよ羽田から飛行機で東京を離れ、北海道女満別空港へ。2時間弱のフライト。外に出た途端に明らかに東京との空気の違いを感じる。こちらは気温が低だけでなく、湿度も低く非常に過ごしやすい。空港からレンタカーで常呂の実習施設へ。北海道は二度目だが相変わらずやたらと広い。軽いガイドランスの後、すぐにウェルカムパーティ。地元の漁師や農協の方が来て巨大なホタテと日本酒を振舞う。常呂では食事は自炊なので、私を含めた学生の半分が湯沢さんの指示でチャンチャン焼きを作る。International students に中々料理の方法が伝わらなくて焦るが、何とか完成させる。北海道にはサッポロビールクラシックという限定のビールがあって非常においしい。日本酒は松竹梅と北海道の地酒が出て、先生方があつという間に真っ赤になる。

▶9日目 - 8月9日

この日は北見市の大島遺跡なるところで発掘体験をする。この遺跡はなぜかパークゴルフ場の近くにあつて、そこから不自然に陽気な音楽が流れてくる（それからこれは常呂全体に言えることだが恐ろしく虫が多い）。表土をスコップで掘り返して箕に土を放り込んで行き、土が溜まったら捨てるという果ての無い肉体労働に従事するが、15cmばかり掘るだけで一日中かかってしまい、考古学がいかにかに体育会系の学問かを思い知らされる。國學院の博物館の土器の展示に途方もない時間と労力

が費やされているのを、身をもって体験させられる。プログラムが始まってから、程よい疲れで夜気持ちよく寝られるようになった。

▶10日目－8月10日

朝4時半に起きたのは地元の漁師の方の船に乗せてもらえるとのことだったからで、半分くらいの学生が参加した。サロマ湖の湖畔（とは言っても潮の香りがしたりして、雰囲気は完全に海である）に付けてある船に乗り、オホーツク海を目指す。この小型船が結構なスピードで走るもので、下手をすれば落ちそうになる。朝焼けの海と湖が信じられない美しさ。少し沖に出てから戻ってくる途中で、養殖しているホタテをその場で収穫して食べさせてもらえる。その場で貝をこじ開けて、貝柱と目以外の部分を海に捨ててその巨大な身を齧るのだが、何もつけずとも海の塩気で恐ろしく濃厚な味がする。目の部分もコリコリとした食感で旨い。宿舎に置いてあったインスタントコーヒーを飲み干し、仮眠をとってから座学。K先生による北海道の考古学の講義。縄文文化が本土（古墳文化）からの影響を受けて擦文文化に変化したというのが面白い。また、一時期擦文文化と重なるオホーツク文化（イヨマンテで有名）に目を向けると、同時期の出土物の類似から、日本がサハリンを通じて大陸の影響をいかに大きく受けていたかがよくわかる。その後とところ遺跡の森の東大の博物館へ。発掘作業を経験した後で土器の展示を見ると、ほぼすべての破片が結合して形を成している土器などを見て驚嘆してしまう。また、土器の接合作業の体験もあった。破片の山から凹凸のびったり合う組を探し求める果てしない作業である（実はこれがパズルのようでかなり面白い、数時間かけて一組しか見つからなかったが、見つかった時の喜びは格別である）。

▶11日目－8月11日

午前中は勾玉の製作体験。皆夢中になって作るので時間が経つのがあっという間である。これまでに数えきれない程の勾玉を作ってきた熊木先生の技量が抜きん出ている。自分の勾玉も、小学生の時にさいたまの郷土博物館で作ったものよりは出来が良い。昼寝した後外に出ると明らかに空気が冷たい。雨の降らないうちに遺跡を見学する。大量の虫にも慣れて来つつある。その後大粒の雨が降ってきて、慌てて施設に戻る。大島遺跡について座学。日本語の講義内容を英語に翻訳したものを日本人の教官から聞かされるという複雑な構図。最後に常呂を特色付けるカーリングの施設を見学に行く（常呂はカーリングの日本代表選手を数多く輩出している）。綺麗な近代的な施設で、比較的若者が多い。その夜はFIGHT CLUBを皆で見るが、日本人は誰も知らないのに対して、International studentsは全員この映画を知っているという事実から、思いがけず情報格差を感じる。

▶12日目－8月12日

最初に向かったワッカ原生花園はサロマ湖沿いの地域であるが、サロマ湖が余りに広いせいで水平線が湖上にあらわれている。また湖に沿って延々と木製の通路が続いていて、ここを自転車で駆け抜けたらさぞかし気持ちの良いことだろう。また、この日は貝塚、竪穴住居跡などの多くの遺跡を車で廻ったが、常呂の遺跡の数の多さに驚く。時には民家のすぐ隣に遺跡があったり、多くの竪穴住居跡が一か所に多く集まっていたりする。また、その次に向かった屯田資料館では北海道の開拓者のインタビューが多く興味深い。自分のかつての暮らしを捨てて、全く生活の基盤の無い北海道に来た屯田兵の家族の心持はいかほどだったのだろうか。

本サマープログラムを通じ、私個人が学び、考えさせられたことは大きく分けて二つある。それは、「実際にものを直接見る大切さ」と「そのものをいかに展示、説明するか」という二つである。以下、この二つの柱を中心に、プログラム全体を個人的に整理、解釈してみたい。

1. 実物を直接見るとのこと

「実物を直接見る重要性」は、そもそも美術史を学ぶ上で何度も言及される「研究上の必要事項」である。そして、必要事項であるにも関わらず、貴重な実物を生で拝見できる機会というのは、極めて限られているということ、専門上痛いほど認識している。しかしその認識に反して、本プログラムではまさかの二日目の午前中から、貴重な考古コレクションを拝見する機会を得た（詳しくは述べるべきではないのかもしれないが）。これらの考古遺物が発する力と時が止まったかのような部屋の空気に、深い感動を覚えたのは私だけではあるまい。

三日目の日光見学と四日目午前の谷根千見学は、この概念を広義に解釈して捉えることが出来るかもしれない。すなわち、「実際にその場所を歩いてみる大切さ」を学ぶ時間であった。日光東照宮は、単に家康公の墓所という役割を超え、様々な点から見て特異な場所である。現在は神社の東照宮・二荒山神社、寺院の輪王寺の二社一寺形式をとっているものの、これは明治の神仏分離の煽りを受けた結果であり、そもそもはこれらが一体となって存在していた。海外からの学生からは「なぜ異なる宗教施設が一体となっているのか？」という質問が挙がっていたが、その疑問は国際的な観点から見ればもつともなるものであろう。そしてこの答えは、単に本地垂迹とか、歴史的事実を説明するだけでは、相手に納得してもらえないものではない。異なる宗教を同時に受容できる日本人の精神性について、否が応にも考えざるを得ないのである。我々日本に住む学生たちは、実際に現地に行き、留学生とその場を共にすることで、このような純粹且つ本質的な疑問に立ち会う機会を得た。谷根千一帯の見学も、そのような意味で興味深い時間であった。まず午前中に谷中霊園にて江戸から残る集合墓地を見、その足で谷中全生庵、更には東京芸術大学美術館にて幽霊画を鑑賞した。つまり、まず自分たちの足で、幽霊が実際に出る場である墓地を見学した後、次に幽霊と密接に結び付く寺という場にて幽霊のイメージを鑑賞、最後に美術館にて幽霊画を現在に展示する試みを見るという、様々な層から日本文化としての「幽霊」に迫れる一日であった。ちなみに、女子学生たちは、この夜部屋で幽霊に関する日本のアニメ（「ぬらりひよんの孫」）を鑑賞したらしい。まさに過去から現在までの幽霊イメージを考える一日となったであろう。

2. ものを展示する、展示されたものを鑑賞する

本プログラム中、我々は数多くの美術館、博物館に訪れる機会を得た。そしてそれぞれが、その展示物に適した方法で展示を工夫していたことを確認した。二日目の午後訪れた江戸東京博物館は、近年の改修後、展示室内に多くの建造物を再現する試みを行っていた。そこでは普通の博物館では史料を見下ろしている私たちが、逆に展示物に飲み込まれているようで、まるでテーマパークにやってきたかのような錯覚さえ覚えた。このような当時を再現する展示方法は、比較的資料の残る近現代の歴史においては有効かもしれない。しかし、先史時代に関してはどうであろうか。常呂実習の際に訪れた「常呂遺跡の森」では、いくつかの竪穴住居が復元展示してある。イローナ先生の講義では、縄文時代の村を完全に再現しテーマパーク化した三内丸山遺跡の例が提示された。規模の差こそあれ、これらはどちらも全く当時の様子が残っていない建造物を今に再現しようとする試みである。もちろん研究が進めば、間違っていた箇所なども出てくるであろう。このような展示の是非や方法についても、考えるきっかけとなった。

東京での國學院博物館、常呂での資料陳列館などの考古に関する博物館では、多くの土器が所狭しと並べられていた。常呂の資料陳列館では、発掘された遺物をなるべく多く展示するというモットーを掲げているようだ。それらの史料は、仮に一つ一つが小さな欠片であっても、一堂に展示されることでまるで全てで一つの展示物であるかのように、我々に古代のイメージを喚起させた。そのようなある種の高揚感の中で、展示物一つ一つについての丁寧な説明を聞いていくことで、日本考古学や北海道の遺跡や文化についての興味がどんどん増していくのを感じていた。同様の展示方法を取っていた施設がもう一つある。東京大学附属博物館「インターメディアテク」である。ここでは、生物学や考古学、医学、理学など分野を横断して、東大の持つ研究資料を展示している。その展示方法は極めて特殊で、特にキャプションを与えず、資料を雑然と展示していく。それら展示物と我々の間には、特にガラスやロープは見当たらない。この博物館の目的は、これらの学問に対する知識を得てもらおうというのではなく、学問や東大自体に視覚を通じて興味を持ってもらおうということであろう。考古博物館と大学博物館の違いはあれど、共通の理念を根底に感じ得た展示であった。

3. 常呂での体験

博物館見学を中心とした東京でのプログラムに対して、常呂ではその遺跡に根差したより実践的な体験活動を経験できた。

常呂での二日目には、早速「大島Ⅱ遺跡」の発掘を体験した。幼い頃からマンガやハリウッド映画などで、発掘をする恐竜学者や考古学者を夢見ていただけに、この作業は夢にまで見た瞬間であった。残念ながら、私の作業する区画からは何も出る事はなかったが、しかしミステリーサークルのように徐々に形を変えていく竪穴遺跡の様子を見て、「今発掘をしているんだ」と感慨を覚えた。実際は大量の蚊や予想外の暑さで、思いを馳せる余裕はあまりなかったのだが。

次の日は土器の接合を体験したのだが、これが意外と難しい。土器の文様を見ながら、その先を予想して、見合う土器を見つけていくのであるが、私の場合、初めの数分で偶然一か所接合できた後は、もう見つけることが出来なかった。しかし、熊木先生の手によると、次々と土器を繋げてしまう。深い経験と知識が成せる技に、皆感心していた。常呂四日目の勾玉制作体験も、予想以上に大変な作業であった。柔らかい滑石であるにも関わらず、なかなか削れない。これを翡翠で制作していた縄文人は一体どれほどの時間をかけたのかを想像してしまう。

これらの体験も、上で述べたのと同様に「実際に経験する」という大切さを痛感させられるものであった。実際に遺跡を掘り、土器を接合し勾玉を制作した上で、それに関する博物館を見学する。ただ博物館にいくだけでは、説明を読み、なるほどと納得するだけであるが、実際に汗をかいた身で見学すると、その遺跡を掘った研究者や更にはその土器や装飾品を創った古代の人々のことまで意識され、受け身ではなくより積極的に博物館や歴史資料に向き合うことが出来た。これがプログラムの目的であったのかと、今となっては考えたくなる。

4. 常呂での学び

常呂で学んだ知識は、悉く新しい知識であり、今まで学んだ日本史の知識とは異なるもう一つの日本史であった。北海道では紀元前一世紀頃から、縄文に続き続縄文文化が始まる。続縄文文化はあくまで、本州が弥生文化に移行する一方、北海道では縄文文化が継続したことによる呼称であるが、それに続く擦文文化は異なる。7世紀頃から13世紀頃まで続いた擦文文化は、そのへらで擦ったような土器紋から、北海道独特の文化である。更に同時期に起こったオホーツク文化、それに続き起こるトビニタイ文化は、北海道の内でも常呂を含むオホーツク海に面する地域のみに見られる特殊な文化であった。このような歴史は、その地域に行かなければ知り得なかった歴史であろう。しかし、それら間違いなく重要な日本史の一部であり、またオホーツク文化の人々が造った熊の彫り物に現れた写実性などは、この地域が美術史的にも無視できない重要な場所であることを示すのに十分なほど見事なものであった。

考古学という学問は、どこか美術史と似ている。歴史学の一学問にも関わらず、文字資料を第一としない。美術史がまず絵や彫刻をよく見よと言われるように、考古学もまず遺跡や遺物に寄り添うことを求められる学問であるようだ。そういった意味で、実際に貴重な作品を鑑賞し、遺跡を発掘し、土器を触ることの出来たこのプログラムの経験は大変有り難いものであった。またヨーロッパからの学生との交流も、日々新しい発見をもたらしてくれた。この夏で得た経験と知識を、今後の成長に活かしていきたいと考えている。

東京の部

▶1日目-8月1日

本郷で顔合わせをした後浅草を歩き、ホテルで休憩、夕食をとってから参加者全員でカラオケに行く。一番初めの自己紹介で、早速自分の英語力のなさを露呈してしまい不安になる。最初はなかなか international students に話しかける勇気が持てなかったが、夜の数時間に及ぶカラオケを通し、ある程度打ち解けることができた。やはり元々日本文化に興味のある学生ばかりで、JPOP やアニソンを好んで歌っていた。今後2週間も楽しく過ごすことができそうだと、期待を抱かせてくれる、素晴らしい夜であった。

▶2日目-8月2日

本郷で日本の古代について講義を受けてグループワークを行い、考古学科の資料室を見せてもらった後、両国で食事、江戸東京博物館を見学。本郷での講義の内容そのものは基礎知識の確認であったが、その後たださえ苦手なグループワークを、英語で行うことには苦労した。英語を「話す」ことにどれほど慣れていないか、改めて実感した。

江戸東京博物館は初めてであったが、本プログラムを通して訪れた数多くの博物館の中でも、個人的に最も気に入った施設の一つであった。吉原の遊女が一日に平均2,3時間しか寝ていなかったという事実を知り非常に驚いた。また、運良く博物館内で尺八と三味線の演奏が行われていたので、全て聞きとおす。素晴らしい演奏であったが、そのために時間が削られ、館内の半分程度しか見ることができなかつたのが悔やまれる。

▶3日目-8月3日

一日かけて日光東照宮を観光。日光には今年2月に行ったばかりであるが、雪に閉ざされても炎天下にさらされても、相変わらず美しい場所であった。参加者はやはり美術に関心のある人が多く、東照宮の華麗な建築や文様に目を奪われていた。僕はどちらかというと、それらの芸術品と一体となった日光の自然に魅了されていた。蟬の鳴き声と木々のざわめきばかり聞いていた気がする。

東照宮を見た後は、日光名物の天然氷を使ったかき氷を皆で食べた。氷がふわふわでとても美味しかったが、練乳味単体で売り出されていなかったことには不満を感じた。

▶4日目-8月4日

午前中は日暮里周辺を散策。谷中霊園を歩き、その後全生庵と藝大で幽霊画を鑑賞と霊尽くし。午後は国立科学博物館を見学。霊園周辺の路地の少し古めかしい雰囲気がとても気に入り、本郷に移ったらここに住むのもありかなと思った。そしてやはり蟬の鳴き声を聞いていた。

藝大の幽霊画展は international students にも好評であった。美術に疎い僕でも、題材が幽霊だとどこか身近に感じ、十分楽しむことができた。美女の幽霊ばかり探していた気がしなくもない。

国立科学博物館は何度か来たことがあるが、自然が好きな僕にとってはいくらでも時間の潰せる素晴らしい博物館である。International students から、ヨーロッパと日本の動植物の違いについて色々聞くことができた。

しかし、連日高温が続いた上にこの日は一日中歩き回っていたので、自分も他の参加者も相当に疲労していた。やはりヨーロッパと比べて東京は大分気温が高いようで、international students も暑さにはうんざりしていた。

▶5日目-8月5日

午前中は國學院大学の博物館を見学。学食を食べた後、等々力溪谷と大塚古墳を見学し、最後に東京駅近くのインターメディアテクへ。夜は他の参加者と共にブックオフへ。

國學院大学の博物館では、展示されている土器の数に驚く。陳列されている土器は3000点程だが、総保有数は10万点に上るらしい。流石は國學院である。また、食堂が駒場とは比べ物にならないくらい綺麗で、値段も安く、美味しかった。東大も頑張つてほしいものだ。

等々力溪谷は、23区内で唯一の溪谷で、ここが本当に世田谷区なのかと疑ってしまうほど、自然に満ち溢れた美しい場所だった。僕はここでも蟬の鳴き声ばかり聞いていた。

インターメディアテクはその名前を聞いたこともなかったが、東大創立以来の収集物を無料で展示している博物館らしい。

動物の骨格・剥製、古い地球儀、近代の実験器具まで、学術的なコレクションが幅広く展示されていてとても面白かった。是非もっと知られて欲しい。

夕食後、竹崎さんの提案で、international students を誘ってホテル近くのブックオフに行く。international students は大興奮で、Stephanie や Charlotte はアニソン CD を何千円分も購入していた。このような中古書店は、ヨーロッパでは珍しいらしい。

▶6日目-8月6日

午前中は東京国立博物館を回り、午後はフリータイム。東博は1時間しか回る時間がなかったので、じっくり鑑賞することができなかった。東大生はタダで入館できるので、時間があるときにまた来たい。展示物では日本刀が印象に残った。

▶7日目-8月7日

東京最終日の七日目は、1日中展覧会を巡る。六本木周辺の国立新美術館、サントリー美術館、森美術館を回り、それだけでも十分なのだが、予定表には根津美術館にも行くと書いてあった。流石に無理があるのではと思ったがやはり無理だったようだ。

国立新美術館ではまず、日本のマンガ・アニメ・ゲーム展を見に行った。僕はこの展覧会に来るのは2度目なのだが、幅広いジャンルの作品が紹介されていてなかなか面白かった。International students が太鼓の達人やダンレボを楽しんでいたが、日本のアーケードゲームは海外にどれくらい進出しているのか気になった。

次に、同じ新美で開催されていた「隣の部屋」展へ。日韓の現代アーティストたちが共同で開催した展覧会で、かなり見応えがあった。ただ、アバンギャルド過ぎて理解に苦しむ作品も少なくはなかった。

サントリー美術館では、なにより藤田美術館収蔵の華麗な陽変天目茶碗が印象的であった。また、美術史の高岸先生の解説を聞きながら絵巻を鑑賞することができたのは、貴重な体験だったと思う。

森美術館では、ベトナムの現代アーティスト、ディン・Q・レの展覧会を見学。非常に個性的な方法でベトナム戦争の悲劇を描き出す作品に心を打たれる。

その後、森ビルの展望台から東京の街並みを眺める。こうして上から見ると、東京にも奇怪な建造物がたくさんあることがわかる。訪ねてみたいものである。

北海道の部

▶8日目-8月8日

ついに東京を立ち飛行機で北見へ。女満別空港の外に出ると、東京とは明らかに気候が違うことを肌で感じた。灼熱の都内から、涼しい北海道へと脱出できて、他の参加者も気持ちよさそうだった。

常呂の施設は森の中にあるがとても綺麗で、僕の住む三鷹寮よりも大分マシに思えた。到着後、サロマ湖畔へと歩き、その大きさに驚く。湖岸の様子もまるで海のようなであった。

ウェルカムパーティーでは、地元の漁師の永田さんから頂いた大きなホタテや、じゃがいも、鮭などを用いた郷土料理を頂く。素晴らしい食材に加えて味付けも良く、驚くほど美味しい料理ばかりであった。地元の人たちも交えた賑やかな食事会は、僕の両親の実家である鹿児島県沖永良部島の宴会を思い出させてくれた。

食事の後は5人で大富豪をして遊ぶ。ただでさえ複雑でローカルルールも多い大富豪を、international students に説明するのは大変だったが、楽しむことができた。

▶9日目-8月9日

当番なので朝食を作る。英語で言えない食材が予想以上に多く、なかなか苦勞する。しかしいずれにせよ僕は料理が全くできないので、結局皿を並べただけであった。

この日は一日かけて大島遺跡の発掘体験を行う。地面を掘ることがこんなに重労働だとは思わなかった。初めはなかなかうまく掘れなかったが、先生たちにコツを教わり徐々に掘り進むスピードが速くなっていった。それにしても、なぜ考古学の人たちは普通の石ころと土器の違いを一瞬で判別できるのだろう、不思議である。そういえばここではあまり蝉が鳴いていない。

代わりに蚊はいくらでも飛んでいるが、嬉しくはない。

▶10日目－8月10日

朝早く起きて、漁師の永田さんに船に乗せてもらう。サロマ湖の湖口を抜け、早朝の静謐なオホーツク海を眺める。帰り道、水中からとり出したホタテをそのまま頂いた。何も調味料をつけなくても、ホタテそのものの味と海水の塩味が染みついでいて、絶妙な美味しさであった。

午前中、熊木先生による考古学の講義を受ける。北海道の考古学、特にオホーツク文化の話は、今まで深く聞いたことがなかったもので、とても興味深いものだった。オホーツク文化を担った人々の「謎の海洋民族」という肩書がなかなか魅力的である。

昼食後、土器の欠片の接合体験を行う。かなり根気のいる作業であり、昨日の発掘体験に続き、考古学の面白さと大変さを同時に味わうこととなった。僕は結局一つも欠片を組み合わせることができなかったが、他の参加者たちが接合に成功した欠片を見てみると、驚くほど綺麗にくっついていて感動した。大変であるがゆえに、成功したときの達成感も大きいのだろう。

その後、廃校になった小学校を利用した常呂の資料館に行く。僕の地元とは対極に位置する学校であるが、やはりその雰囲気はどこか似通っており、懐かしさを感じた。この建物を郷土の記憶を残す資料室として再利用したのは、素晴らしい発想だと思う。

▶11日目－8月11日

午前中は勾玉作り体験を行う。やわらかい滑石で作るのもかなり大変であった。縄文人はヒスイでこれを作っていたというが、どれほどの時間をかけたのだろう。

自分なりに満足いく勾玉が完成し、他の参加者同様暫く首にぶら下げていた。しっかり磨いた表面はツルツルで気持ちがよく、勾玉を触ることが癖になってしまった。そういえば昔地元鹿児島の上野原遺跡でも勾玉を作った記憶があるが、熊木先生によると南九州で勾玉は一般的ではなかったらしい。だまされた気分である。

その後熊木先生の講義を受けた後、カーリングホールを見学に行く。カーリングは、ホタテ、遺跡と並ぶ常呂の名物らしく、オリンピック選手もたびたび輩出していると聞く。しかし僕自身はスポーツに興味がないので、北見市の地図ばかり眺めていた。館内に北見の水族館のポスターが貼られていたが、「ここから72キロ」という案内が記されており、北海道スケールを感じた。

▶12日目－8月12日

午前中は常呂の竪穴住居跡、貝塚や鮭の捕獲場を見学し、午後は隣の湧別町の歴史博物館に行く。流石常呂というべきか、農家の畑にも平気で土器や黒曜石が落ちている。こんなにたくさん落ちているのなら一つくらい持っていても大丈夫なのは、と思ったが、湯沢さんに止められたので諦めた。

鮭の捕獲方はなかなか大胆で、川の岸から岸まで仕掛けを渡し、そこを通る鮭を一網打尽に捉えてしまうという恐るべき仕組みであった。しかし栽培漁業の形をとっているもので、環境に大きく影響するわけではないのだろう。

湧別町の歴史博物館では、解説員の屯田兵についての説明がとてもわかりやすかった。それにしても、日本の地方都市の歴史博物館に共通する独特の雰囲気は癖になる。故郷に帰ってきたような気持ちになるのかもしれない。

この日の夜は、初日と同じように、地元の漁師さんや農家の方の差し入れを素材に、バーベキューを楽しんだ。地元の人々のおもてなしには、ただただ感謝するばかりである。

今回のプログラムを通して、英語が流暢に話せるようになる、ということはもちろんなかったが、言語の壁を越えて人と交流することに対する抵抗をなくすことができたように思う。また、自国の美術的、考古的な文化についてより深く知ることができただけでなく、他国の人々が日本文化に対してどのような認識を持ち、それが自分とどう異なっているのか、少し理解することができた。この2週間の素晴らしい体験を、今後も生かしていきたい。

東京の部

▶1日目-8月1日

法文二号館で、全体ガイダンスが行われた。ガイダンスの場に行って初めて分かったことに、私は日本人学生の中で唯一の女子生徒であり、学生全体の中で唯一の一年生であったということであった。そのため、英語力、学術面においてこのプログラムについていけるかどうか非常に不安であった。

ガイダンスの後、全員で浅草へ向かった。英語力に不安があり会話に自信を持つことができなかつたため、なかなか海外からの学生と話すことができなかつたことが悔やまれた。

▶2日目-8月2日

本郷キャンパスで、設楽博己教授による考古学の講義が行われた。先史、縄文、弥生、古墳のそれぞれの時代についての概論についてのものであり、講義が終わった後はグループに分かれて5分間のプレゼンテーションを行うことになった。私たちのグループは意思疎通がうまくいかず、5分の尺を使い切ることができなかつた。英語力の不足が大きな一因だが、外国人学生とどのくらい日本の古代について知識の共有が出来ているのかが十分に把握できなかつたことが失敗の原因であり、改めて異文化間でのコミュニケーションの難しさを体感した。

午後からは、江戸東京博物館を見学した。普段東京に住んでいても東京の歴史を知る機会は少ないため、この機会に知ることができて良かったと感じた。

▶3日目-8月3日

浅草から日光へ向かい、日光東照宮や付属する博物館を見学した。日光には初めて訪れたため、日光東照宮のその贅の尽くされた建物に圧倒された。一緒に回ったことで海外からの学生の反応や感想を知ることができただけでなく、学部4年生の美術史専攻の先輩から美術史的な観点からの日光東照宮の解説をして頂いたため、より深く日光東照宮を鑑賞することができたと感じた。

▶4日目-8月4日

この日はグループワークの予定であったが、学生の提案により、東京藝術大学美術館で行われていた「うらめしや〜冥途の土産」展に全員で向かうことになった。途中、千駄ヶ谷や日暮里を徒歩で散策し、谷中霊園なども見学した。展覧会では、曾我蕭白の幽霊がとても迫力があり、印象的であった。話を知らない人のために怪談のあらすじが掲載されているなど、全体的によく構成された展覧会であったと感じた。

4日目になったが、まだ海外からの学生とあまり話すことができなかつた。というのも、話すことに原因があるというよりむしろ、話しかけられても聞き取ることができず、会話を円滑に進めることができなかつたためであった。

▶5日目-8月5日

午前中は國學院大學博物館を見学した。神道についての歴史や、土器・装身具など考古学についての展示が行われていた。挙手人面土器など、珍しい形の土器が展示されており、古代の人間の文化の豊かさを感じ、彼らがより身近に感じられた。また、縄文人は粗末な生活をしていて、という先入観があったため、縄文人は翡翠に穴を空けるほどの技術力を保持しており、一般的に思われているよりもずっと文明的な生活をしていて、という解説が目から鱗であった。午後は、野毛大塚古墳を見学したのち、インターメディアテクで行われていた常設展示『Made in UMUT — 東京大学コレクション』を見学した。東京大学で行われた研究の一端を知ることができ、視覚的にも知識的にも興味深い展示であった。「弥生時代」の名称の由来となった、文京区弥生で発見された土器も展示されており、感動的であった。

▶6日目-8月6日

上野にある東京国立博物館を見学した。日本美術史専攻の先輩に解説を加えていただきながら鑑賞したため、絵画の背景にある事情や事実などの知識を得ることができ、充実した体験となった。その後、自由時間であったが、希望者は歌舞伎へ行くこととなった。私自身歌舞伎は初めてであり、海外からの学生同様楽しみにしていた体験の一つであった。源平合戦に題材を取った「ひらかな盛衰記」を鑑賞した。人物関係が複雑な演目であり、理解して鑑賞できるかどうか不安であったが、事前に

大筋を調べていたため想像していたよりも理解しやすく、歌舞伎特有の型や演出に触れることができ、新鮮であった。海外からの学生もオーディオガイドの貸し出しがあったため、歌舞伎をより身近に感じる形で体験してもらえたのではないかと感じた。

▶7日目-8月7日

美術館を巡った1日であった。初めに、今回参加した海外からの学生のほとんどが、日本のサブカルチャーに興味を抱いていたため、国立新美術館で開催されている「ニッポンのアニメ、マンガ、ゲーム」展を鑑賞した。海外からの学生が日本人の学生同様、むしろそれ以上にこの展示を楽しんでいる様子を見て、昨今のサブカルチャーの持つ国境を越えて楽しむことができる力のようなものを改めて間近で感じた。その後、同美術館で「アーティスト・ファイル 2015 隣の部屋——日本と韓国の作家たち」を鑑賞した。日本と韓国のアーティストによる現代美術が多く展示されており、今までのプログラムで鑑賞した美術展とは異なった種類の美術に触れることができ、考え・感じるが多かった。場所を移動し、次はサントリー美術館の「国宝 耀変天目茶碗と日本の美」に向かった。高岸輝教授により所々で作品についての解説をして頂けたため、作品をより濃密度で鑑賞でき、学ぶことが多かった。国宝であり、なかなかこのような綺麗な形で展示されることのない耀変天目茶碗を見ることができたため、貴重な経験となった。宇宙を感じる、美しい陶器であった。

その後、六本木の森美術館で、ベトナム人アーティストのディン・Q・レ氏の個展「ディン・Q・レ展 明日への記憶」を鑑賞した。

北海道の部

▶8日目-8月8日

羽田空港から北海道・女満別空港に飛行機で移動した。北海道には一度行ったことがあったが、函館・札幌に訪れたのみであったため、女満別空港を利用して常呂町に行くことは新鮮な体験であった。東京大学常呂実習施設において、歓迎会が行われた。地元の漁師の方々が、帆立など新鮮の海の幸を提供してくださり、豪勢な食卓となった。

▶9日目-8月9日

大島2遺跡の発掘体験を行った。考古学を専門的に学んだことがなかったため、発掘の実際の作法や形式を学べ、有意義な体験であった。発掘は体力を消耗するものであり、考古学の違う側面での大変さを学ぶことができたように思う。

▶10日目-8月10日

早朝、漁師である永田さんのご厚意により、漁師船に乗せて頂いた。サロマ湖からオホーツク海に抜け、養殖されていた帆立の刺身をその場で頂いた。とても貝柱が大きく、獲れたであったので、普段食べている帆立とは比べ物にならないほど美味しい帆立であった。

午前中は、実習施設において熊木俊明先生により北海道の古代文化についての講義が行われた。高校の通史ではあまり触れることのない北海道の古代文化について詳しく解説して頂けたため、とても興味深い講義であった。続縄文、擦文、アイヌ文化、という歴史と併行して、沿海州や樺太とも関連のあるオホーツク文化が存在し、それが擦文文化と融合してトビニタイ文化が形成された、という事実を初めて知り、簡単に「北海道の歴史」と一口でまとめることのできない文化の多様さ・その交流の有様に感銘を受けた。その後、東京大学文学部資料館へ行き、実際にどのようにそれぞれの文化が変遷し、または融合していったのかという様相を土器や道具を通じて確認した。例えば、トビニタイ文化の土器は形こそ擦文土器であるが、その繊細な文様はオホーツク文化のそれであった。

午後は、実習施設において土器の接合体験を行った。さまざまな種類の土器が混在していた上に、接合する土器破片の数が多く、なかなか接合できる土器破片が見つからなかったため、とても苦勞した体験であった。

▶11日目-8月11日

午前中は研究室で滑石を使用して勾玉の製作体験を行った。形を綺麗に形成するのが以外と大変であったため、予想以上に熱中してしまい、時間が掛かった。作ってみて初めて分かったことであるが、勾玉は内側をくり抜くのが大変である。勾玉の形の起源は三日月、熊の歯、胎児、など諸説あるが、いずれにせよ古代の人々をしてこのような複雑な形を形成させようということは、古代の人々にとってこの形はよほど重要なモチーフであったのであろうと感じた。

午後は、北見市内にあるカーリングホールを見学した。北見はカーリングでとても有名であるというのは知っていたが、北見で優勝するとオリンピックが視野に入る、ということを知り、改めてその強豪さに驚かされた。

▶12日目 - 8月12日

午前は、常呂町内の遺跡をいくつか見学した。山の中にある住居跡や、道路沿いにある貝塚跡など、常呂町内にはその存在があまり知られていないものの、考古学的に重要な遺跡が多くあることを知った。地元の農協の職員さんと話す機会があったとき、常呂には東京大学だけではなく、自国内に多く遺跡を抱えているはずの北京大学が足繁く訪れる、という話を聞いた。中国には遺跡が多いものの、そのほとんどは既に調査が終了しているか、また開発により調査が不可能である、というのが原因であり、それに対して常呂は重要な遺跡が手つかずのまま残っており、考古学においては世界有数の重要な地である、というのがその理由である。この話を聞き、距離的に遠く、観光地でないためその重要性について気づかれることが少ないが、実は歴史的・学問的に重要である常呂町のような町の価値について再考する必要があると感じた。

午後は、屯田歴史博物館を見学した。屯田兵の歴史について焦点を当てた珍しい博物館であり、興味深い展示が多かった。展示を見て、学芸員さんの話を聞くと、教科書上で習った僅かな知識で形成した屯田兵のイメージとは異なった屯田兵の姿が思い描けた。例えば、屯田兵は全国から集められており、それぞれの方言があまりに異なるために意思疎通が大変であった、というエピソードが掲載されていたが、私は以前まで屯田兵がそこまで広範な地域から集められている、ということを知らなかったためとても驚いた。また、日本各地の方言が意思疎通ほど異なっているということから、標準語の形成・浸透が未熟だった当時の日本の姿を窺い知ることができ、そのことも衝撃的であった。他にも、開拓使は家族単位で送られたのではなく、厳しい基準を満たした若者と、その家族の中から一次産業に従事して食糧生産を行うことのできる者のみが移住できた、ということや、屯田兵には勤務期間が設けられていることや、屯田兵やその家族は北海道の先住民であるアイヌの人々の生活様式を学ぶことはなく、出身地域の生活習慣を保持しようと努めたため、生活に苦労したこともあった、ということを知ることができ、今までの知識の未熟さを痛感した。非常に訪れる価値のある博物館であった。

総 括

このサマープログラムは、海外からの学生と寝食を共にすることで異文化間のコミュニケーションを図れるとともに、普段の学生生活で出会うことのない先輩方とも出会うことができ、多方面での知識の交換や、言語スキルの向上を行える機会を提供してくれる非常によいプログラムであったと感じた。もちろん、その機会は提供されても生かせるかどうかは自分自身にかかっており、実際私はほぼ最後まで海外からの学生と満足にコミュニケーションを取ることができず、後悔が残った面もあるが、逆にリスニング能力と日常会話のストックが少ない、という自分のコミュニケーションにおける課題を発見することができたと思う。また、そのような多様な人々と共に博物館・美術館を訪ね、集中的に多くの美術的文化に触れることも、日常生活においては滅多にない機会である。東京と北海道で多くの博物館・美術館を回ったことで、そうした世界に思いを馳せ、それらの存在・その価値などについて考えることができたように思う。文学部の学問を学びながら、尊敬すべき学部先輩方や、各々のバックグラウンドを持つ海外からの学生と交流する、という非常に恵まれた体験ができたため、私はこのプログラムに参加してよかったと感じた。



まとめと今後の展望

東京大学大学院人文社会系研究科・教授

佐藤 宏之

サマープログラム（文学部夏期特別プログラム）も2年目となり、今年度は比較的早く準備を開始することが出来た。文学部内にプログラムの実施を担当するワーキング・グループを組織し、前年度の内容を基本的に踏襲しながらも、反省点を踏まえた手直しを行い、実施の運びとなった。

さまざまな現地体験を共有しながら国際交流の実を肌で感じ取ってもらうことを第一の目的とする本プログラムでは、8月1日から8月15日までの15日間、東大生と外国からの参加学生を区別せず、昨年同様全期間ホテル（東京上野）や学生宿舎（常呂）で同室してもらった。常呂実習施設での朝晩の食事は、日欧双方の学生ペアによる自炊であり、交流の実を上げる格好の機会となった。座学・実習はもちろん、日常会話は全て英語が基本である。今夏の猛暑のため、新しく企画した下町探索グループワークの時間を短縮せざるを得なかったり、後半の常呂では天候不順の影響で発掘体験の日程を縮小したりしたが、参加者レポートにもある通り、参加学生にはきわめて好評であったと自負している。

本プログラム全体の基本は、主として考古学と文化資源学に関する学習においたが、前半の東京の部では、ひろく日本文化全般にも目配りできるように、日光見学や東京の代表的な博物館・美術館等の見学を充実させた。フリータイムでの歌舞伎座観劇やカラオケといったサブカル体験は、今年も外国人学生にはすこぶる好評であった。

後半の常呂には人文社会系研究科附属常呂実習施設があり、猛暑の東京から一転して涼しい気候の中で、北海道の先住民文化の学習や歴史遺産の活用を目的とした講義、遺跡の発掘体験、博物館での体験活動や地域博物館の社会連携活動等を実地に学んでもらった。道東沿岸という地の利を活かした海産物を堪能してもらうこともできた。地元住民とのBBQやチャンチャン焼きの体験は、地域連携を実感できたことだろう。

今年のプログラムは、セインズベリー日本藝術研究所と東大文学部との間で1月に締結した部局間国際交流協定に基づき実施した初年度にあたる。今年度から4年間、日英間の本格的な学生の相互交流が始まった。来年2月には東大から英国に学生を派遣する冬期特別プログラムを始めるため、現在その準備を行っている。夏期・冬期のプログラムを実施することで、次年度以降さらに充実したプログラムを計画していきたい。

末筆ながら、参加・担当・協力いただいた全ての教職員・TA・関係者の皆様に深謝いたします。

東京大学大学院

人文社会系研究科・文学部

東京大学大学院人文社会系研究科附属
北海文化研究常呂実習施設

〒093-0216 北海道北見市常呂町字栄浦376



東京大学 本郷キャンパス

〒113-8654 文京区本郷7-3-1



平成27年度
文学部夏期特別プログラム
(報告書)

編集発行 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部
〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1

発行日 2015年12月25日

印刷 三鈴印刷株式会社

東大文

 SAINSBURY INSTITUTE
for the Study of Japanese Arts and Cultures
セインズベリー日本藝術研究所

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/>